
ハリポタ二次創作 ~ 蓮暁 密 ~

神城 透音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリポタ二次創作 〉 蓮暁 密 〉

【Nコード】

N2842H

【作者名】

神城 透音

【あらすじ】

ハリー・ポッターの世界を舞台にオリジナルのキャラを主人公にしたお話。ある事情で異世界へと飛ばされていたヒロインが10年後、ホグワーツへ戻って来てその教授であるセブルス・スネイプと暮らし始めます。他のサイトで連載中の作品です。

第1章 a t h u n d e r s t o r m 〱 雷雨 〱 (前書き)

原作キャラのイメージを壊すおそれもあります。

そういった事に抵抗のある方はご退室下さい。

気にしない方は次のページへお進み下さい。

* 作品の原作者様、出版者様および製作会社様の方々には関係ありません。非公式でやっています。ご迷惑でしたら即削除いたします。

第1章 a thunderstorm 雷雨

「うわっ！降って来た」 突然、激しい雷雨に襲われ、密^{しきみ}は雨宿り出来る場所を探し、雨を凌いでいた。

雷の光と音の間隔が短くなって来ているけど、この辺に落ちた
りしないよね……

そういえば、10年前のあの日も雨が降っていたな……

ピカッ、ドンッ！！

バリバリ……ゴロゴロゴロ……

えっ！？

突然、眩しい光に包まれ目が眩んだ。

雷が目の前に落ちた？

それとも、私が雷に打たれた？

頭の中がどんどん真っ白になって行き、意識が遠のいて行く……

「マクゴナガル教授、スネイプ教授、突然呼び出してすまんの」

「いえ、何かあったのですか？ダンブルドア校長」 マクゴナガルと呼ばれた女性が言った。

「何かあったと言っより、これから起こるかもしれんと言った方が
良いじゃろっ」

マクゴナガルもスネイプと呼ばれた男性も眉間に皺を寄せ、一体何
が起こるのだろうか？と顔を見合わせていた。

「間もなくじゃ……もう間もなく現れるはずじゃ……」

ガタガタガタッ

その時、部屋が大きく揺れ、光と共に全身びしょ濡れの少女が突如
現われ、床に足を着けるとそのまま崩れ落ち、意識を失った。

「校長、これは……この子は誰なんです？」 マクゴナガルが言っ
た。

「説明は後じゃ。スネイプ教授、彼女をそのソファーに。マクゴ
ナガル教授は着替えを」

「はい」 マクゴナガルは杖を取り出し一振りすると、着替えが現

われた。

《……シキミ？まさか……そんな……》

スネイプは今現われた少女をジッと見つめ、ピクリとも動かなかった。

「スネイプ教授、彼女をこちらに。そのままでは風邪をひいてしまいます」 マクゴナガルが言った。

《髪と瞳の色が違うな……やはり他人の空似なのか……》

「スネイプ教授！」

「……ああ」 スネイプは何度目かの呼び掛けにやっと反応し、少女を抱きかかえソファーに寝かせた。

「校長、この子は……」 スネイプが言った。

「名前も何処から来たのかも分からんのじゃが、今日、現われる事が先刻、予言されたのじゃ。身元が不明なので、信頼のおける君達2人のどちらかに親代わりを勤めて貰いたいと思って呼んだのじゃが……それは彼女が目覚まし、少し話を聞いてから決めるとするか」

外で雨宿りをしていた筈なのに、いつの間にか部屋の中にいる。

アンティークな感じの物が沢山置いてある、見覚えの無い部屋

……

此処は一体、何処なのだろうか？

『目が覚めた様じゃの。気分はどうかね？』

半月メガネを掛けた長い髪、長い髭の老人……

この人は誰？

何を言ってるの？

他にも2人……

とんがり帽子を被り、魔女みたいな格好をした女性と、全身真っ黒な服を着た男性。

3人共、顔つきが外国人……

此処は日本じゃないの？

『わしの言葉が分かるかね？』

って、これ英語!？

私、英語ってまるっきりダメなのに……

どうしよう……

密が困った顔をしたまま何も答えないと、黒い服を着た男性

が杖を取り出し櫛に向けて一振りした。

「あーっ！それ！！」 櫛はその男性が手にしている杖に飛びついた。

「なっ、何をする！放したまえ！」

「あっ、ゴメンなさい……っ、あれ？言葉が分かる」

「我々の言葉を理解していなかった様なので、一時的だが分かる様にした」

「すごーい！！まるで魔法みたい」

「みたいではなく、魔法だ！」 男性は眉間に皺を寄せたまま、きっぱりと言った。

「わしは此処、ホグワーツ魔法魔術学校の校長をしており、アルバス・ダンブルドアじゃ。そして彼女が副校長のミネルバ・マクゴナガル教授。彼がセブルス・スネイプ教授じゃ」 ダンブルドアと名乗る半月メガネを掛けた老人が、笑顔で自己紹介をした。

「私は櫛・櫛シキミ・サカキです。あのー、此処は日本じゃないですよねえ……何
で私、此処にいるんでしょうか？」

「ミス・櫛、此処はイギリスじゃよ。何故、君が此処に現われたの
かは、わし等にも分からぬ。わしが聞いた予言は今日、少女が此処
に現われるとだけ言っておったのでの」

イギリス！？

さっきまで日本にいた筈なのに、どうやって此処まで来たんだ
らう？

それに魔法って……

「わしは君に何処かで会った様な気がするのじゃが……」

「すみません、私には覚えがないので、人違いかと思います。あの棒は何ですか？」 密はスネイプが持っている杖を指差した。

「杖じゃよ。杖は自身の持っている魔法の力を杖先に集中させ、増幅させるものじゃ」 ダンブルドアが言った。

「杖……私もそれに似た物を持っているんですけど……」 密は自分のカバンの中から杖を取り出し、ダンブルドアに見せた。

「わし等の持っている杖と同じ様じゃが、これを何処で手に入れたのかの？」

「いつ、何処で手に入れたものなのか分からないんです。私、6歳の時に雨の中で彷徨っているのを保護されたんですけど、記憶を失くしていて名前と年齢しか覚えていなかったんです。これはその時所持していた物の1つなんです」

「そうじゃったか……ミス・榊、その杖を振ってみて貰えんかね？」
ダンブルドアは密に杖を返した。

「杖を振る？……何も起きないと思いますよ。今までこの杖を振り回しても何も起こった事ありません」 と言いながら密はダンブルドアに言われた通り、杖を振ってみた。

すると、杖から色とりどりの鳥達が現われ、暫く部屋の中を飛び回った後、開いていた窓から外へ出て行った。

「なっ、何で!？」 密はとても驚いた顔をしていた。

「やはり君にも魔力があるようじゃの。ミス・榊、この学校で魔法の事を学んでみる気はないかね？」 ダンブルドアはにっこりと笑って言った。

「学んでみたいとは思いますが、私、親もいませんし、お金も持っていないので無理です」

「心配はいらんよ。君の面倒を見てくれる、親代わりを探せば良い事じゃ。さて、誰が良いかの」 ダンブルドアはマクゴナガルとスネイプを覗き込む様な目で見た。

「我輩が彼女の親代わりに」 スネイプがすぐに答えた。

「君、自ら申し出るとは珍しいの。わしは構わんが、どうかね？」
ダンブルドアはスネイプを見つめた後、視線を密に変えた。

「別に誰でも構いませんけど……でも、いいんですか？」

「勿論じゃよ。では、君の保護者はセブルスで決まりじゃな。ところでミス・榊、君は今いくつかの？」

「えっ！？あー、16歳です」

「もう少し幼く見えておったが、16歳じゃったか。本来なら6年生になるんじやが、君は魔法の事を何も知らん様じやの。とりあえず、1年生と一緒に学んで貰って君の実力を見てみようかの」

「はい」

「今日から夏休みに入ったから、新学期から君は1年生じや。この1年での君の様子を見てから、最終的な学年を決めようかの」ダブルドアが言った。

「はい」

「では、夏休みは保護者であるセブルスと過ごしなさい。セブルス、頼みましたぞ」

「はい」 2人は同時に返事をした。

第2章 櫛の秘密

「櫛^{しきみ}、部屋は2階の左端を使いたまえ。服など必要な物は明日、買いに行くでしょう」 スネイプは自宅に戻るとすぐに櫛の部屋を用意した。

「はい、有難うございます。スネイプさん」

「家にいる間は、セブルスと呼びたまえ。それとこの家の物は好きに使って貰って構わん。本も勝手に読んで構わぬ。興味があればだ
がな」

「はい」

夕食後、スネイプは櫛と自分の分の紅茶を入れた。

「美味しい。こんなに美味しい紅茶を飲んだの初めて」

「そうか」 スネイプは少し照れながら嬉しそうな顔をした。

さっきまで、眉間に皺を寄せて不機嫌そうな顔をしていたから、ちよつと恐くてこれから一緒に生活して行けるか不安だったけど、この顔を見た途端、不思議なのだが大丈夫だと思った。

いつもこつという優しい顔をしてくれたらいいのにな……

「あ、あの一、聞いてもいいですか？」

「何だね？」

「今日、初めて会った得体の知れない私の親代わりを自ら申し出たのは、何ですか？」 密は恐る恐る聞いてみた。

《昔出会った少女と同じ名に似た顔、姓や髪の色、瞳の色は違うのだが、何故か同一人物に思えて仕方がない。お前は一体、誰なのだ？》

「お前に興味を持ったからだが、それでは不満かね？」

「いえ」

また読み取りづらい表情に変わった……

この人は不機嫌というか無表情に近い顔ばかりしているけど、声を上げて笑ったりする事ってあるのかな？

「杖は持ったであろうな？」

「はい」 買い物ついでに何とかっていうお店で、この杖を調べて貰うと言っていた。

杖は1本1本違う物で、1つとして同じ物はなく、杖と使い手には相性というものがあって、杖自身が持ち主の魔法使いを選ぶらしい。だから人の杖を使っても、自分の杖程の力は出ないと教えて貰った。

「移動には『煙突飛行粉』を使う。このフルーパウダーを一掴み取り、あの暖炉の中で目的地を言いながら、足元へふりかける。はっきり発音しなければ、違う場所へ飛ばされてしまうので、気をつけたまえ」

「は、はい」

ただでさえ知らない場所なのに、目的地と違う場所へ飛ばされたら大変。

しっかり、はつきり発音しなくちゃ。

「我輩が先に行く。同じ様について来たまえ」

「はい」

スネイプはフルーパウダーを掴んで暖炉の中へ入り、『ダイヤゴン横丁』と言いながら足元に粉を投げつけた。
するとエメラルド・グリーンの炎が上がり、その炎が消えるのと同じ時にスネイプの姿も消えてしまった。

「す、すごい！」 密は目を輝かせて驚いていた。

って感動している場合じゃなかった。

襪もフルーパウダーを掴み暖炉の中へ入ると、『ダイヤゴン横』
と言いながら足元に粉を投げつけた。

巨大な渦を巻いて吸い込まれる感覚に襲われ、高速で回転している
様な耳が聞こえなくなるかと思う程の轟音がしていたが、暫くする
と冷たい手で頬を打たれた様な感じがした。

襪は前のめり倒れ込み床にぶつかると思った瞬間、目の前が真っ暗
になり柔らかい感触に包まれた。

「無事に来れましたな」 耳元で素敵なベルベット・ヴォイスが聞
こえた。

「あつ！す、すみません」 目の前の黒くて柔らかい感触は、スネ
イプだった。

密が慌てて離れると、スナイプは杖を一振りして密の服についた煤を落とし綺麗にした。

「普段着る服を買いに行く。ついて来たまえ」

密はスナイプの後について『マダムマルキンの洋装店 普段着から式服まで』と書かれた店に入って行った。

「これはスナイプ教授。今日はどういったご用でしょうか？」 愛想の良い、ずんぐりとした魔女が出て来た。

「今日は、この娘の普段着を買いに来た。ついてにホグワーツの制服も頼む」

「かしこまりました。ではお嬢さん、その踏み台に立って下さいな」

「はい」

密が踏み台に立つとマダム・マルキンは寸法を測ったり、密の頭か

ら長いローブを着せかけ、丈を合わせてピンで留めて行った。

「終わりましたよ。服は後でふくろう便で届けさせますね」

「ああ、頼む」 スネイプはお金を払うと店を出て行った。

その後も色々なお店へ行き、必要な物を買ひ、最後に『オリバンダーの店 紀元前382年創業 高級メーカー』と書かれた店に入って行った。

「いらっしやいませ」 柔らかい声がして、目の前に老人が現れた。

「おお、スネイプ教授。話はダンブルドア校長から聞いていますぞ。そちらのお嬢さんの杖を調べれば良いのじゃな。お嬢さん、お名前は何？」 オリバンダーの大きな薄い色の目が、櫛をジッと見つめていた。

「櫛・榊しきみ・さかきと言います。杖はこれです」 櫛はオリバンダーに杖を見せた。

オリバンダーはその杖を手に取り、調べ始めた。

「ま、まさか……そんな……榊さん、この杖を降ってみてもらえるかね？」

「はい」 密はオリバンダーから杖を受け取り、一振りした。

すると天井から雪が降り始め、それが途中から花びらに変わった。

「ブラボー！素晴らしい。だが、不思議な事もあるもんじゃ……まったくもって不思議じゃ……」

「あー、何がそんなに不思議なんですか？」 密が聞いた。

「君の名前は本当に榊なのかね？」

「……はい、そうですけど」

「そうか……この杖は、ある一族のみ扱える杖の一つで、11年前にその一族の長の孫娘の5歳の誕生日に贈られたものなんじゃが……その一族は10年前に滅んだと聞く。どういいう経緯で手に入れたかは分らんが、この杖は間違いなく君を選んだ。大切にしなされ」

「はい。ありがとうございます」

2人がやりとりしている間、スネイプはずっと眉間に皺を寄せていた。

帰りも行きと同様にフルーパウダーを使って、スネイプの家であるスピナーズ・エンドへと戻って来た。

櫛が暖炉から飛び出した途端、スネイプはまた抱き留めてくれたのだが、今度は抱きしめたまま、櫛を放そうとしなかった。

「セ……セブルス、苦しい……」

「す、すまん」 櫛を解放したスネイプの顔には、少し赤みがさしていた。

「調べものがある」と言って、スネイプは自室に籠ってしまった。

夕食の時間になってもスネイプは部屋から出て来なかった。櫛は1人で夕食を済ませた後、食事をスネイプの部屋に持って行く事にしたのだが、スネイプの部屋のドアをノックしても、ドア越しに

声を掛けてもまったく返事がなかった。

食事も採らず他の音が聞こえない程、集中して一体何を調べているんだろう？と気にはなつたが、勝手に部屋に入るわけにもいかず、柵はドアの近くに腰を下ろし、スネイプが出て来るのを待つ事にした。

それからどの位、時間が経つたのか分からないが、スネイプが部屋のドアを開けると足元に食事が置いてあり、その横で柵が眠っていた。余りにも気持ちよさそうに眠っていた為、スネイプは柵を起こすのを止め、自分のベッドへ寝かせた。

「流石に女性の部屋に無断で入る訳にはいかぬからな……」

スネイプは夕食を済ませると、柵が寝ているベッドへ近づいて行った。寝顔を見ながら髪や頬に触れていたスネイプは、顔を近づけ柵の唇に自分の唇を重ね合わせた。

「……っん……ん!？」 柵は目を覚まし、スネイプが自分に対してしている行動に驚いていた。

「セブルス、何を」

「お前が何処の誰だろうと構わぬ。我輩はお前の全てが欲しい。密、お前を初めて見た時から、我輩の心はお前に奪われてしまった」
密の言葉を遮りスネイプが言った。

「私の事を好きという気持ちがあつて抱くのなら、何があつても私を護るといふ覚悟が必要よ。そうじゃなきゃ、後悔する事になるかもしれないけど、それでも私を抱く？」

「我輩にその質問は愚問ですな。愛しい者を護るのは、当たり前的事であるう？」

やっぱり、この人の心は読みづらくて何考えてんだか分からない……

「……そう。なら好きにしていいわ」

どちらからともなく口づけを交わし、櫛はスネイクを受け入れた。

体がダルい……

というか、あそこが痛い……

足のつけ根も……

スネイプは密に「愛している」と囁き、2人は何度も体を重ねた。

「夕べ貴方が言った言葉は本当だったよね」 密は自分の体の一部に目をやってから、隣で眠っているスネイプの顔を見つめた。

この人を当たり前の様に受け入れてしまった。

嫌だという気持ちができなかった。

何でだろう……

本当に不思議な人……

密はスネイプの唇にキスを落とすと、スネイプは薄目を開け密の顔を確認し、そのキスに答えた。

「密、お前に聞きたい事があるのだが」 甘く熱いキスが終わった後、スネイプが言った。

「何ですか？」

「お前の体が男性を受け入れたのは、昨夜が初めてだったのに何故、拒まなかったのだね？お前が我輩に好意を持っている様には思えんが」

「確かに貴方に対して好きという気持ちはありません。貴方だけではなく、他の人にも……今まで好きになった人は一人もいません。私、愛情という部分が欠落しているのかもしれない……」

「愛情を……好きという気持ちを持った事が無いのかね？今まで、一度も？」 スネイプは眉を吊り上げた。

「ええ、一度も。貴方に対して愛情は無いけれど、何か不思議なものを感じたの。拒まずに受け入れるべきだと……それと、貴方の私への愛は信じれるわ。それは私の体が証明しているから」

密は左胸の上の方にある、肩に近い部分の模様をスネイプに見せた。

「私の本当の名前を教えてあげる。私の名は……密・蓮暁。シキミ・レンギョウ昨日、オリバンダーさんが言っていた10年前に滅んだ蓮暁家の生き残り」

「やはり、そうであったか……」

「6歳の時に記憶を消され、この世界に良く似た異世界へ飛ばされたの。かろうじて自分の名前と年齢だけは覚えていたけど、それ以外は何も覚えていない」

「記憶を消されたのに何故、その事を知っているのだね？」

「異世界に送られた時、杖の他に所持していた物があるの。それは手帳。向こうの世界では何も書かれていない手帳だったんだけど、此処に戻った日に開いてみたら、数ページ文字が現れていて今話した事などが書かれていたの」

「手帳に書かれていたからといって、それが事実かどうか分からないであろう？」

私の言っている事、信用していないみたい……

まあ、普通、疑うよね。

私だって自分の身に起こっていないなければ、話を聞いただけで

は信用しないと思うしね。

「手帳に書かれている内容は私の記憶と、私へのメッセージ。これを読んだ途端、その部分の記憶が戻って来たの。あっ、それと夕べの約束守らなくてもいいよ」

「何故だね？」 セブルスはまた眉を吊り上げた。

「蓮暁家の者だと言わずに抱かれたから……もしかして、気づいていながら私を抱いた？」

「気づいていてお前を抱いた。だからこれからもお前を抱く。異存あるまいな？」 スネイプは真剣な面持ちで密を見つめた。

《あの時の少女がお前だと気づいていた。やっとこの手で触れる事が出来たのだ、もう手放したくはない》

「本当にそれでいいの？」 密はスネイプの返答に驚いていた。

「我輩は初めに言った筈だが。体だけが目当てではない、お前の全てが欲しいと。それに蓮暁家の女性は男性を受け入れてから第1子を身籠るまでは、週に1度は必ず男性と交わらねば如何のであろう？ お前が他の奴に抱かれるのは耐えられん」

《第1子を身籠るのには、他にも条件が揃わねば出来ぬらしいから、密が身籠るのは当分先の話であろうな》

「私に愛情が無いと知っていても、それでも抱くの？」

「ああ。そのうち我輩に愛情を抱くかもしれないからな。もし、他の奴を好きになった場合は……まあ、その時、考えるでしょう」 ス
ネイプはニヤリと笑った。

《蓮暁家の女性に愛情欠落者はいない。密の場合、何らかの理由で記憶と一緒にその感情も封じられた可能性が高い。いつ、どの様なきっかけでその感情が戻るかは分からんが、その時、傍に居るのが我輩である事を願いたい》

「分かった。セブルスの私への愛は信じられるから、私に好きな人が出来るまで、貴方に抱かれる事にする。もしかしたら一生、私を抱き続けなくてはいけないかもよ」 密もニヤリと笑った。

「構わぬ。だが何故、我輩の愛が本物だと信じれるのだね？」

「それは、この模様が左側にあるから。初体験の相手の気持ちの表れ。簡単に言うと、左側は私を想う気持ちがあつて抱いた印。逆に右側は愛情のカケラもなく、ただ体が目当てつて事なの。それにしても、貴方が蓮暁家の事に詳しいのは何故？」

「昔、少し交流があつた。蓮暁家の第1子は銀色の髪に金色の瞳の筈だが、何故お前は黒髪で瞳は黒みがかつた薄茶なのだ？それも封印されたと言つのかね？」

「銀色の髪に金色の瞳？何それ？そんなの知らない。私も」

コッ、コッ、コッ

話の途中で何か窓ガラスを叩く様な音が聞こえた。

「セブルス、あれは？」

「ふくろう便だ」 スネイプは窓を開け、ふくろうを中に入れた。

ふくろうは部屋の中へ入ると、櫛の元へやって来て小包を渡した。

「えっ？私に？」 櫛は小包を受け取り開けている間、ふくろうはスネイプからビスケットを貰い、それを美味しそうに食べていた。

「ダンブルドア校長からだ」 手紙と一緒に浴衣が同封されていた。

「話があるから、明日の3時に此処に来るって」 櫛はスネイプに

知らせた。

「分かった。OKの返事をこのふくろうで出すといい」

「はい」 櫛はダンブルドアに手紙を書き、ふくろうに渡すとふくろうは入って来た窓から出て行った。

「話の続きは明日、校長がみえてからの方がいいだろう」 スネイクがそう言ったので、櫛はそれ以上何も聞かなかった。

翌日、ダンブルドアが約束の時間通りに暖炉から姿を現わすと、スネイクは3人分のお茶を用意した。

「セブルス、君の淹れるお茶は格別じゃの」

「ありがとうございます」 スネイクは無表情のまま礼を言った。

「あっ、あのー、ダンブルドア校長。浴衣をありがとうございます。でも何でも浴衣なんですか？」 昨日、送られて来た浴衣を着た櫛は不思議そうに訊ねた。

「君に似合う気がするの。うん、やはり似合っておる」 ダンブル
ドラはニコニコしながら言った。

ん!?

ただの趣味?

私は着せ替え人形じゃないんだけど……

「ところで、ミス・榊。君が日本にいた記録が一切残っていないかったのじゃが、何か心当たりはおありかの?」

ダンブルドアのブルーの瞳は密の目を見つめ、まるで心の中を覗いているかの様だった。

「多分、それは私が別の世界から来たからだと思います。此処とよく似た異世界。違う所は魔法というものが無い事ぐらいかも……校長先生にも私の事、ちゃんと話さないといけませんね」

柊は自分の本当の名前や手帳の事など、自分が知っている事をダンブルドアに全て話した。

「やはり、あの時の少女が君なのじゃな。わしは君の祖母である、
緋桐・蓮暁ひぎり・れんきょうとは古い友人での。君の記憶、言葉、瞳や髪の色、そして愛情の封印に携わったのじゃ。そしてその後、君が異世界へと送られるのを見送った」

「そうだったんですか……それなら私より、蓮暁家の事をご存知なんでしょうね。まあ、今の私には蓮暁家の事は知らないに等しいんですけどね。……それなら、この意味もお分かりですよ？」

柊は左肩の服をずらし、模様の一部をダンブルドアに見せると、スネイクは少し顔を赤くしながらダンブルドアから視線を外した。

「何と、何と……二人はもうそういう関係になったのか。まあ、遅かれ早かれそういう運命ではあったのじゃがの」

「そうなる運命！？ どういう事ですか？」 柊は驚いて聞き返した。

「わしが今言うても意味をなさん。いずれ思い出す時が来るじゃろ

う。それより、そういう関係になってしまったからには学校生活が始まったら週末は、セブルスの元で過ごした方が良かるう」 ダンブルドアはにっこりと笑って言った。

「ダンブルドア校長、手帳に『銀色の髪に深紅の瞳の者には気をつけなさい』と書かれていたんですけど、何かご存知ですか？」 櫛がその質問をした途端、2人の表情が曇った。

「あの者は死んだのではないんですか？」 珍しくスネイプは取り乱していた。

「あやつは深手を負っただけで死んではおらんのだよ、セブルス。そしてきつとまた櫛を狙って来るじやろう。何せあやつは櫛を我がものにする為に、禁忌を犯し闇の力を入れたのじゃからの」

禁忌って何？

私を狙っているってどういう事？

櫛は何が何だか分からないという顔をしながら、ダンブルドアを見つめていた。

「櫛にも分かる様に説明せねばいかんの。彼の名は、『焰豎^{えんじゆう}』。蓮暁家の血を引く者だったが、禁忌を犯し蓮暁家から追放されたのじや。年はセブルスより2、3歳下じゃったかの」

「はい。我輩の後輩でした」 セブルスが答えた。

「あの一、禁忌って何ですか？その禁忌を犯すとどうなるんですか？」 櫛が聞いた。

「蓮暁家の女性は1度異性と体の関係を持つと、最低でも週に1度は交わりをしなくてはいけない事は知っておろう。男性の場合は少々違う様でwashもよくは知らんのじやが、男女共にそれをせずに性欲を絶ち、その幾日ケ目に最後に関係を持った者を殺すと今までの何倍もの力が手に入るそうじや。但し、それは闇の力に類するものなのじやよ」 ダンブルドアは一旦、言葉を切った。

「焰豎の力を封じようとしたのじやが、焰豎は当時、最も恐れられていた『例のあの人』とか『闇の帝王』と呼ばれておるヴォルデモート卿と結託し、蓮暁家の者を次々と殺して行ったのじや。蓮暁家の者は魔力の強い者が多く、特に緋桐は偉大な魔法使いの1人じやったから、ヴォルデモート卿は蓮暁家を自分の配下に置きたかったのじや。だが、蓮暁家はそれを拒み、戦う事を選んだのじや。その

戦いの結果、蓮暁家は破れ、君以外の者は皆殺された……」

「偉大な魔法使いがいたのに負けたんですか？ 焰豎やヴォルデモートはそれほどまでに強いんですか？」 櫛がヴォルデモートの名を口にした途端、スネイプは恐れにも似た顔をした。

「君の祖母、緋桐は君を異世界に送るのに膨大な力を使っておつての、その力が回復する前に襲われてしまったのじゃ」

「そんな……」

私を異世界に送らなければ、祖母は死なずに済んだかもしれない。

私のせいで祖母は……

「櫛、自分を責めるでない。例え君を異世界へ送らなくても結果は同じじゃったろう。いや、もっと最悪な状態になっておったかもしれぬ。君が焰豎やヴォルデモート卿の手に堕ちればそれこそ最悪じ

や。……その後、焰豎は姿を消しヴォルデモート卿は、ある赤ん坊によって敗れたのじゃ」

「赤ん坊ってハリー・ポッターという子の事ですね。本で読みました」

「そうじゃ。ハリーは今、安全なのじゃが問題は君じゃ……」 ダンブルドアは密を見つめ、心配そうな顔をしていた。

「ダンブルドア校長は姿を消した焰豎が、まだ私を狙っているとお考えなのですね」 密が言った。

「その通りじゃよ。君がこの世界に戻って来た事にまだ気づいておらんと思うが、いずれ気づくじやろう。念の為、ホグワーツ以外では1人で外出しない方が良くもしれんの」 ダンブルドアが言った。

「我輩が共に行動致しましょう」 スネイプが言った。

「その方がよかろう。では、わしはそろそろ戻るとしようかの……おっと忘れるところじゃった。絳桐から蓮暁家の金庫の鍵を預かっておったのじゃった」 ダンブルドアはポケットから3つの鍵を取り出し、密に渡した。

「1つの金庫に3つの鍵を使うんですか？」

「いや、1つの金庫に1つの鍵じゃよ。どれでも好きな鍵を使いなさい。それでは新学期に、学校での」ダンブルドアは櫛に向かつてにっこりと笑うと、スネイプと2人だけで少し話してから来た時と同じ様に暖炉を使って帰って行った。

「セブルス、貴方も焰豎がまた私を狙って来ると思っているの？それは何故？」ダンブルドアが帰った後、渡された金庫の鍵を暫く見つめていた櫛が聞いた。

「焰豎は将来お前を自分の妻にしたいと考えていたのだが、それが叶わぬと知り力ずくでお前を我がものにしようとしたのだ」

「自分より10も離れた幼い私を見て将来、妻にしようと考えたの？その当時、私は5、6歳でしょ？もつと年の近い女性は沢山いるのに、何でそんな幼い私を？長の孫だから？」

「お前は当時からズバ抜けた存在だったのだ。魔力も容姿もな」

「容姿もって、セブルスは私の子供の頃を知っているの？」 柊は驚いた顔をしながら聞いた。

「……ああ。何度か見かけた事がある」 スネイプの表情からは相変わらず何も読み取れなかったが、柊はスネイプがまだ何か隠している様な感じがしていた。

心を奥底にしまい込んで、他の人には触れさせない様にして
いる感じがする。

でも、何を考えているのか読み取れなくても不思議と不安な
感じはしない。

柊は彼に対していつの間にか警戒を解いてしまっていて、彼の言葉を信用している自分に少し驚きを感じていた。

本当に不思議な人……

第3章 鴉

「しきみ 櫛、これを身に付けておきたまえ」 スネイプは小さな箱を櫛に渡した。

「えっ!? あっ、はい」 箱を開けると中には、びょうしほいせき 猫睛石別名、キヤツツアイのついたピアスが入っていた。

「それを身に付けておけば、定期的に術を掛けなくても言葉が分かる様になっている」

「ありがとうございます」 櫛はピアスを耳に嵌めた。

「それと、ホグワーツの入学許可証と学用品リストだ。制服や大鍋など一部の物はこの間、買っておいだが教科書はまだでしたな。明日、一緒に買いに行くとしよう」

「はい」 櫛は嬉しそうに封筒を受け取った。

翌日、密とスナイプは煙突飛行粉フルーパウダーを使って、ダイヤゴン横丁へ買い物に出掛けた。

「セブルス、先にグリーンゴッツ銀行へ行つて、お金を下ろして来たいんだけど」

「お前に掛かる費用は全て、我輩が出すと言つた筈だが」

「私にも財産があるつて分かつたんだから、自分で払います。今まで使つた分と、これからの生活費などもちゃんと受け取つて下さい」
密はきっぱりと言つた。

「……仕方が無い、承知しよう」 2人は先にグリーンゴッツへと向かつた。

グリーンゴッツはひと際高く聳える真っ白な建物で、磨き上げられたブロンズの観音開きの扉の両脇に、真紅と金色の制服を着て小鬼が立っていた。

小鬼は浅黒い賢そうな顔つきをしていて、先の尖つた顎鬚があり、手の指や足先がとても長かつた。

「ホグワーツ以外では、このグリンゴッツが世界一安全な場所だろう。間違っても小鬼と揉め事を起こそうなんて思っなよ」 スネイプは無表情のまま密に言った。

グリンゴッツの中は広々とした大理石のホールになっていて、100人を超える小鬼が細長いカウンターの向こう側で、脚高の丸椅子に座り大きな帳簿に書き込みをしたり、真鍮の秤でコインの重さを計ったり、片眼鏡で宝石を吟味したりしていた。

ホールに通じる扉は無数にあつて、これまた無数の小鬼が出入りする人達を案内していた。

「密・蓮暁しきみ・れんぎょうの金庫から、お金を取りに来た」 スネイプはカウンターに近づいて言った。

「鍵はお持ちでいらっっしゃいますか？」

「あつ！はい」 密は3つの鍵を小鬼に渡した。

「承知しました。それではどちらの金庫をご利用なさいますか？」
小鬼は慎重に鍵を調べてから言った。

「じゃあ、これで」 櫛は3つの鍵の中から1つ選び指差した。

「では、金庫の方に案内させましょう。グリップフック！」

櫛とスネイプはグリップフックの後について、ホールから外に続く無数の扉の1つへ向かった。

扉の先は松明に照らされた細い石造りの通路になっていて、急な傾斜が続き、床に小さな線路がついていた。

3人がトロツコに乗り込むと、勢いよくトロツコは走り出した。

グリップフックが舵取りをしていないのに、トロツコは行き先を知っているかの様に、勝手にビュンビュン走って行き扉の前で停車した。

「このトロツコ、今までに乗ったどのジェットコースターより楽しい」 櫛はそう言いながらスネイプの方を見ると、スネイプは黙ったまま眉間に皺を寄せていた。

相変わらず何を考えているのか読み取れない……

もしかして、セブルスはこれ苦手だったのかな？

セブルスにも苦手なものがあるんだあゝ

何か、可愛い……

櫛が思わずクスツと笑ったら、スネイプは更に眉間に皺を寄せ、櫛を睨みつけた。

櫛はその睨みに気づかないフリをして、扉の方に歩いて行った。

グリップフックが扉を開けると、金庫いっぱい金貨、銀貨、銅貨が所狭しと高く積まれていた。

「すごいー！ー！これ全部、私の？」 柊は驚きの声を上げた。

「ああ。これと同じものがあと2つ。その鍵で開かれる扉の向こう
ある」 スネイクが言った。

そうだった……

鍵は全部で3つあったんだった。

「必要な分だけ取って、買い物に行きますぞ」

「は、はい」 櫛が袋にお金を入れようと金庫の中へ入ると、お金以外にも何かある事に気がついた。

「あー、これも持って行っていいですか？」

「お前の金庫なのだ、好きにしまえ」 スネイプが答えた。

櫛はお金と、2冊の本の様なものを持って外へ出た。

「金貨がガリオン、銀貨がシッケル、銅貨がクヌート。17シッケルが1ガリオンで、29クヌートが1シッケル。覚えておきたまえ」

「はい」

グリーンゴッツを出ると2人は、教科書を買いに書店へと向かった。

「ねえ、セブルス。あの鴉^{カラス}、私達の後をずっとついて来ている気がするんだけど……」 櫛は店の屋根の上に留まっているカラスを指差した。

「気のせいではないのか？第一、鴉なんぞどれも似た様で見分けが

つかないであろうっ？」

「うん……でも、他の鴉と何か違う気がするんだけど……」

「我輩には他の鴉と何ら変わりがない気がするが」

何でだか分からないけど、あの鴉が気になって仕方が無い。

あの鴉を知っている様な……

昔からの友達に会った様な、懐かしい気がするのは何でだろ
う……

「教科書は此処で買える」 スネイプは鴉には興味なさそうに『フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店』へと入って行った。

「あつ、待って下さい」 櫛もスネイプの後について、書店へと入って行った。

櫛達が書店での買い物済ませて外へ出ると、鴉は先程の屋根にいて書店の方を見ていたが、櫛は気づかぬフリをしてスネイプの後について歩き出した。

「自分用のふくろつを買つかね？」

「えっ？あー、いえ。いらなです」 櫛の返答にスネイプは眉を吊り上げた。

「あー、そのー。……私、虫が苦手で……ふくろつに餌をあげれないから……」 櫛は俯いて言った。

「虫が苦手？それは困りましたな……」

「何ですか？」

「『魔法薬学』の授業では虫の死骸や、時には生きた物を切り刻まねばならんのだが、出来ますかな？出来なければ減点や罰則の対象になるから、心していたまえ」 スネイプは意地悪そうな笑みを浮かべていた。

「む、虫を切り刻む！？そんなの絶対、無理です！どうしよう……」
櫛は蒼い顔をして落ち込んでいた。

《蓮暁家は魔術だけではなく、薬学にも通じていた筈。それに昔は櫛も平気で虫を扱っていたと思ったが……》

ふくろつは買わずに、無言のまま自宅へと帰って行った。

密は家に戻ってから、溜め息ばかりついていた。

「いい加減にしたまえ！虫が苦手なら、今から慣れて行けば良からう？」

「そんな簡単に言わないで下さい。平気で扱える貴方には、私の気持ちなんて分からないでしょう？」

「ああ。分からないし、分かりたいとも思わぬ」

「でしょうね！」　そう言って密は走って自分の部屋へ戻って行った。

学校が始まるまであと1ヶ月弱、その間に虫が平気になるだろうか？

見るだけでも嫌なのに、触るなんて到底無理。

セブルスに八つ当たりして、怒らせちゃったし……

憂鬱な事ばかりだ。

はあ……と溜め息をついた後、窓から外を見ると電線に、鴉が1羽とまっているのが見えた。

密は窓を開け、鴉に向かって「おいで」と声を掛けてみると、鴉は密の方に飛んで来た。

「お前、私の言葉が分かるの？」　密が尋ねると、その鴉は頷いているかの様に首を縦に振った。

「すごい！私の言葉が分かるのね。今日、ずっと私達の後をつけていたでしょう？」　鴉はまた頷いた。

「私、貴女の事、昔から知っている様な気がするんだけど、貴女は

私の事、知ってる？」

「はい、存知あげております。密様」

「！？しゃ、喋った……」 密は驚いて後退りをし、ベッドに尻餅を着いた。

「すみません。驚かせるつもりはなかったのですが……やはり、まだ記憶を失くされたままなのですね？私は幼き頃より、貴女様にお使いして参りました。名は」

「鳳……」 鳳が自分の名を告げる前に、密が名を呼んだ。

「思い出されたのですか？」 鳳は嬉しそうな声で言った。

「ゴメンなさい。懐かしいという感情と名前しか思い出せない」

「そうですか……でも、時期に思い出すでしょう」 鳳は少しガツカリした感じだった。

その後、密は鳳を連れて下へ降りて行った。

「何だね、その鴉は？」

「お久し振りです。セブルス・スネイプ殿」 櫛が口を開くよりも先に鳳が挨拶をした。

「なっ!？」 スネイプは驚いて、椅子から滑り落ちそうになっていた。

「失礼。この格好でお会いするのは、初めてでしたね」 次の瞬間、鳳は女性の姿に変わり、櫛はポカンと口を開いていた。

「鳳、お前、生きていたのか……でも何故、此処が分かったのだね？」 スネイプは眉を吊り上げて聞いた。

「櫛様が死なぬ限り、私は死ぬ事はない。私は櫛様の魔力を糧に生きているのだから、櫛様を見つげ出す事は造作も無い」

「ちょ、ちょっと待って！セブルスと鳳は知り合いなの？それに私の魔力が糧って何？何で人の姿と鳥の姿になれるの？」 櫛が2人の会話に割って入った。

何が何だか、サッパリ分かんない。

2人だけで話を進めないで、私にも分かる様に説明してよ…

…

「ちゃんと説明しなさい！鳳」 人型の鳳に触れた途端、密は意識を失いその場に崩れ落ちた。

「「密!？」」 スネイクと鳳は同時に叫び、倒れる密を鳳が抱きとめた。

「ひきり緋桐様、もう間もなくお産まれになります」

まだ成長しきっていない鴉が、蓮暁家の長である緋桐の元へやって来た。

「そうですね。既に貴女がこの世にいると言つ事は、力を持った子が産まれるのでしょうか。本来なら、魔力が現れ始める5、6歳頃に貴方達、使い魔は産まれて来る筈ですからね」 緋桐は微笑みながら言った。

「緋桐様、お産まれになりました。可愛らしい女の子です」 鴉が現れてから数分後、屋敷しもべが緋桐に報告しに来た。

「分かりました。今、行きます」

「鳳、早く〜！」

「待って下さい、密様。そんなに急ぐと転びますよ」

「だって、頼まれた薬草と虫を見つけて早く、おばあちやまの所へ行きたいんだもん。ねえ鳳、鴉の姿になって虫を見つけてくれない？」

「無理です。私は密様の魔力を食糧としているのですよ。虫など食べないので、普通の鳥の様には見つけられません」

グキッ、ドテッ

「いた〜い！」

「だから言ったではないですか、転びますよって。痛む所は何処ですか？」

「右足首」 密は目に涙を浮かべてはいたが、必死に泣くのを我慢していた。

「足を捻挫しているかもしれませぬ。私はまだ、治癒の方法を学んでいないので、緋桐様達に治して貰いましょう。家まで歩けますか？」

「分かんない。だけど、頼まれたものを探って行かないと……」

密は痛いのを我慢して立ち上がるつもりだったが、鳳が制した。

「私が採って参ります。密様は此処で足を冷やして置いて下さい」
鳳は冷却術を唱え、密の足を冷やすと薬草と虫を採りに行った。

「密様、お誕生日おめでとつございます」

「ありがとう、鳳。あつ！ねえ、見て！パパとママがね、誕生日のお祝いについて杖を買ってくれたの」
買って貰ったばかりの杖を鳳に見せた。

「それとね、今日、あの人に初めて会いに行くんだよ。鳳も一緒に来てくれるでしょ？」 柊は嬉しそうに言った。

「勿論、お供致します。ですがその前に、身なりをきちんと整えて下さい」 鳳は柊に新しい着替えを渡した。

「約束をちゃんと守ってくれた様ですね、セブルス」 鳳は気を失った柊をソファーに寝かせた後、そのまま傍にいるセブルスに向かって言った。

「貴方なら必ず守ると思っていましたけど。なんせ柊様を一目見た時から、心を奪われていたご様子でしたからね。まあ、柊様の20

歳の姿を見せられては、誰もが心を奪われてしまつてしょうけど」「
鳳は昔を思い出し、クスリと笑った。

「……………」 スネイプは返事をする代わりに、顔を赤くしながら
ら櫛の髪を撫でていた。

「貴方が約束を守ってくれたお蔭で、当面の間、焰えん竪じに櫛様の居所
を気づかれる事は無いと思いますが、出来るだけ用心はしておいて
下さい。どんな手を使って櫛様を探し出して来るか、分かりません
からね」

「言われなくとも承知している。それより、櫛は大丈夫なのかね？」

「心配いりませんよ。櫛様は私の記憶に少し触れてしまっただけで
すから。その部分を見終われば目を覚まします」

スネイプは片眉を吊り上げて鳳の顔を見たが、すぐに櫛の方に目を
向けた。

「……………うっ、うん……………セブ……………ルス……………」

柊は目を開けスネイプの首に手を回し顔を近づけ唇を重ね、初めて柊の方からスネイプの口内に舌を入れ絡ませた。

甘く激しいキスが終わると、柊は再び眠りの中へと堕ちて行った。

「今のは柊様の無意識の行動ですから、目を覚ました時、柊様は覚えていないでしょう」

「別に構わぬ。例え覚えていなくとも、無意識に我輩を求めたという事は、我輩にとっては喜ばしい事ですからな。そうであるう？」
スネイプはニヤリと笑った。

「そうですね。愛情部分を封じられたままでも、貴方を求めたのですからな」

「鳳、お前は愛情部分が封じられた理由を知っているのかね？」

「勿論、知っていますよ。異世界にいる間、貞操を守る為です。向こうの世界で、何も知らずに男性と交わってしまっただけは大変ですからね。柊様をお守りする為に施された術の1つです。ただ、いつ封印が解けるのかまでは分かりません」

「そうであったのか……」

暫くすると、櫛は完全に目を覚ました。

「気分はどうですか？」 スネイクが聞いた。

「うん、大丈夫。私、夢を……ううん、あれは記憶……鳳、貴女の記憶でしょう？」 櫛はスネイクから鳳へと視線を変えた。

「はい、私の記憶の一部です。どの部分を覗いたのかは分かりませんが、共通した記憶は戻られたものではありませんか？」

「断片的に見ただけだけど、見た部分は思い出したよ。ねえ、私の5歳の誕生日の日に会いに行った人って誰？会うのを心待ちにしていた人なのに、誰なのか全然思い出せないの……」

「それは私の口からは申し上げられません。櫛様がご自分で思い出さなくてはなりません」 鳳はきっぱりと言った。

「そう……」

今、一番思い出したい記憶……

胸が締め付けられ、苦しい様な気持ちになる。

その人が誰なのか知りたい……

その人に会いたい……

第4章 入学までに

「鳳^{ほう}、虫を捕まえて来てくれない？出来れば小さいやつ」

「虫ですか？構いませんが、何するんです？」 鳳は不思議そうに聞いた。

「虫に慣れる練習。初めから大きいのは無理だから、小さいのから慣れて行こうと思って……」

「虫が苦手なのですか！？何故です？幼き頃は平気で触り、緋桐^{ひきり}様達の調合のお手伝いをなされていたじゃありませんか！」 鳳は驚きの声を上げた。

「何故って聞かれても困るんだけど……」

「……分かりました。何か捕まえて来ます」 鳳は虫を捕りに外へ出て行った。

暫くして鳳は、ダンゴ虫を1匹捕まえて戻って来た。

「丸まっている状態の時の方が触り易いと思いますよ」

「う、うん……でも、やっぱり無理！」 柊しきみは今にも叫び声を上げ
そんな顔をしていた。

机の上に紙を乗せ、その上にダンゴ虫を置いたのだが、見るのも苦
手な柊は少し離れた所に立っていた。

「大丈夫です。噛みついたりしませんから、触れてみて下さい」

柊が恐る恐る手を伸ばして行った時、ダンゴ虫がモゾモゾと動き出
してしまった。

「ギャー……ッ……!!」 柊は叫び声を上げ、大騒ぎしながら
部屋を飛び出して行った。

部屋の外に飛び出して行った柊は、何か黒い物体にぶつかったので、
その正体を見ようと顔を上げてみると、眉間に皺を寄せたスネイプ
の顔が見えた。

「何の騒ぎだね？」

「す、すみません……虫を触ろうとしたんですけど、モゾモゾと動き出して来たもので……」

「下らん！そんな事でいちいち騒ぐのは止めたまえ」

「そんな事？貴方にとっては下らない事かもしれませんが、私にとつては逃げ出す程、恐怖なんです！」　　櫛はムツとした顔で言い返した。

スネイプは怒った顔も可愛いと思い、にやけそうになったがそれを隠す様に、更に深く眉間に皺を寄せた。

「どうでも良いが、余り騒々しくしないで頂きたい」　　スネイプは持っていた包みを櫛に押しつける様に渡すと、自分の部屋へ戻って行った。

櫛は訳が分からないままそれを受け取り、包みを開けた。

「ん！？ギャーーーーーッ！！！」　　櫛は悲鳴を上げながら包みごと放り投げた。

悲鳴を聞いた鳳が部屋から出て来て、硬直している櫛と放り出され床に散らばっている物を交互に見つめた。その後、鳳は床の物を拾い櫛を部屋の中に入れた。

「櫛様、これはただのオモチャですよ」

「オモチャでも何でも虫は嫌いなもの！」

そう、スネイクが櫛に手渡した包みの中身は、本物に見立てた動かないオモチャの虫だったのだ。

「そこまで恐がるとは……本物に慣れる前にこれで慣れた方が良くもありませんね。何だかんだと言っても、やはりセブルスは櫛様を気に掛けている様ですね」 鳳はにっこりと笑った。

「だけど、こんなに沢山いらないよ……それにオモチャの虫が入っているなら入っているで一言、言ってくればいいのに。セブルスは私の嫌がる姿を見て楽しんでるんだよ。絶対、そうに決まってる！」

それは多分、貴女の嫌がっている姿も愛らしさがあって可愛いからだろうと思ったが、鳳はそれを口にはしなかった。

「何はともあれ、後でちゃんとお礼を言った方がいいですよ」

「……………」 桜は頬を膨らませたまま返事をしなかった。

「今日はもう虫を見たくないから、これは明日にする」

桜は虫のオモチャが入った包みをサツと机の隅に寄せ、グリーンゴッツから持って来た冊の本を取り出した。

「それは何です？」

「グリーンゴッツの蓮れん暁ぎょう家の金庫の中に入ったの。何だか気になったからお金と一緒に持って来たんだけど……………」 捲つてみると2冊とも手書きで何やら書かれていた。

「呪文と調合の手引きの様ですね。一般的なものから蓮暁家に伝わるものまで、色々と書かれています。あっ！これ……………」

鳳が手にしていた本の最後のページは袋状になっていて、その中に写真が十数枚入っていた。

「これ、私の家族……………」

「はい、そうです。家族写真は櫛様の誕生日毎に必ず撮っていた写真です」

写真には0歳〜6歳までの櫛と一緒に、櫛の両親と祖母の姿が写っていて、2人に向かって笑顔で手を振っていた。

確かに赤ん坊を抱いている女性は、鳳の記憶で見た祖母の顔だ。

これが私の家族……

これが私の両親……

そしてこれが幼い頃の私……

私以外はもうこの世にはいない。

会いたいと思っても、話をしたいと思っても2度と会えない。

その上、子供の頃を思い出そうとしても何も思い出せず、私の記憶はまだ深い霧の中にある。

「密様、私は外で見張りをして来ますね」 鳳は密にハンカチを渡してから、鴉かいつの姿になり外へ飛び立って行った。

鳳が出て行ったのと同時に、密の目に溜まっていた涙が止め処もなく溢れ出て来た。

パパ……

ママ……

声を聞かせてよ。

記憶の中でもいいから声が聞きたい。

それなのに、声どころか姿も思い出せないなんて……

いくら写真を見つめていても、両親の記憶は何一つ思い出さなかつた。

夏休みが終わる日までには、何とかオモチャの虫を触れられる様に

なったのだが、本物の虫を目の前にと手を近づける事は出来ても、触れる事はまだ出来なかった。

「どうしよう……明日から学校が始まるのに、虫に触れない。これじゃあ、薬学の授業受けられないよ……鳳、何かいい方法ない？」
柊はトランクに荷物を詰めながら言った。

「虫に触る方法ですか……柊様一人で触れる様になる方法とは違いますが、あります。私と柊様が融合し、1つになれば可能です」

「融合？」

「はい。私が柊様の中に入ると、私の能力の一部を柊様が扱える様になるのです。その間、虫に触ったり切り刻む事が平気になります。但し、条件があります。1人でも虫に触れる様になる訓練を続ける」と約束して下さるのでしたら、薬学の授業の時、手助けを致します。どうなさいますか？」

「分かった。その条件を呑むわ。だけど、この事はセブルスには内緒にしているね」

「はい」

コン、コン

ドアをノックし、スネイプが部屋に入ってきて来た。

「ホグワーツの生徒達は皆、ホグワーツ特急に乗って学校へ向かうのだが、お前は汽車には乗らず我輩と一緒に煙突飛行粉フルーパウダーでホグワーツへ向かう」

「えーっ！私も汽車に乗って行きたかったのに……」

「お前の身に何かあっては困るのだ。それ故、一番安全な方法でホグワーツに向かう。これは校長と話し合って決めた事だ」 スネイプは無言を言わせぬ言い方をした。

「……はい」 櫛は渋々、承諾した。

「明日からは週末のしかお前を抱けぬ……今夜は覚悟しておきたまえ」

タオル1枚でお風呂から出て来たスネイプは、櫛を抱き寄せて言った。

「あつ、ちよつ……んっ……」

櫛は抵抗し、スネイプの傍を離れ様としたのだが、しっかりと抱きしめられ逃げる事が出来ず、スネイプに唇を奪われてしまった。

スネイプは櫛の唇の隙間から舌を滑り込ませ、逃げ惑う舌を絡め取り、甘く激しいキスをした。

櫛は唇を離そうとしたのだが、スネイプに頭を押さえられてしまい、逃げる事が出来ずにされるがままとなってしまうた。

息が苦しくなり、段々意識が朦朧として来て力が抜け始めた頃、櫛はやっと開放された。

スネイプはそのまま櫛を抱きかかえると、ベッドへと運んだ。

「今日こそは、お前の奏でる声を聞きたいものですな」 スネイプはニヤリと笑った。

「嫌です！絶対に声を出しません」

「そうムキになって我慢する事もなかるう？」

スネイプは櫛の唇に軽く口付けをしてから首筋に舌を這わせながら服を脱がして行き、鎖骨の下を強く吸い上げた。

「……っん……」

上半身の下着も剥ぎ取られ、スナイプの口と手で胸の膨らみを責められた時、櫛は声を上げそうになったが必死に我慢した。

スナイプは声を押し殺して我慢している表情も愛しいと思いつつながら愛撫し、櫛の体に紅い花を咲かせて行った。

「……んっ……あっ……」

スナイプが片方の手で下着の上から神秘の部分をなぞる様に刺激した時、微かではあるが櫛は思わず声を漏らしてしまった。

「可愛い声が聞こえましたぞ」

スナイプが耳元で囁くと、櫛は顔を真っ赤にしながら首を横に振った。

スナイプは最後の下着も剥ぎ取り、櫛の体を舐め回す様に見つめた。

「綺麗だ……お前の全てが欲しい……」

濡れ始めた蜜壺の中へと指を入れ、蜜の感じる部分を的確に刺激し、蜜がイク寸前で指を抜いた。

「さて、蜜。次は何をして欲しいかね？」

「……………」 蜜は頬を赤らめ潤んだ瞳でスナイプを見つめた。

「言わぬのなら、このまま止めても構わんのだぞ」

「……………セブルスのものを……………射れて欲しい……………」

「ならば声を押し殺さず、感じるままに声を発すると約束して頂けますかな？」

顔を真っ赤にした蜜が頷くと、スナイプは反り立つ自身を蜜壺の中へと射れて行った。

「うっ……………」

夏休みの間、何度も受け入れ慣らされて来たが、スナイプの反り立ったものは蜜には大きい様で、初めだけ痛みが伴っていた。

スナイプが身を沈め少しづつ腰を動かして行くと、痛みは快樂へと形を変える。

「……………やつ……………うっうん……………」 密は体を反らしながら声を漏らし始めた。

「あつ……………はんっ……………」 密の喘ぎ声を聞き、スナイプは興奮を増し速度を速めて行く。

「セブルス……………もう、ダメ……………」 密はスナイプの体にしがみつく様に抱きしめた。

「もう、限界ですかな？」

「あつ、あん……………もう無理……………壊れちゃいそう……………」

「ならば、一緒に」 スナイプは更に速度を上げ、奥まで突き上げる。

「ダメ……………イッちゃう……………」

密はスナイプに強くしがみつき体をビクンと震わせたのと同時に、スナイプは蜜壺の中に白濁とした液を放出した。

2人の結合部分は、そこに心臓が移動したかの様にドクンドクンと波打っていた。

スナイプは密に口付けをし「今夜は寝かせませんぞ」と耳元で囁き、ニヤリと笑った。

第5章 姫！？

「いつまでそんな不機嫌な顔をしているのだ！本当にお前は我輩以上
に寝起きの悪い日が多い……」

朝食を食べ終えても、ずっと不機嫌な態度をとっている密つねに向かってセブルスが言った。

「それは誰のせいでしょうねえ」 密は眉間に皺を寄せ、スネイプを睨みつけていた。

「それは我輩ではなく、お前自身が悪いと思うが？」

「はあ？何でそうなるんです？」 密は更に眉間に皺を寄せた。

「あのような声を奏でるお前が悪い。お前のその躰にあのような声では、己の欲望を抑えるのは我輩でも無理というものだ」 スネイプはさりと言った。

「貴方が私に対して欲望を抑えた事ってありましたっけ？それに貴方も私と同じ様に1時間ぐらいいしか寝ていない筈なのに、眠そうな顔もせず何でそんなに元気なんですか！？まさか、何か薬を？」

絶対に何か飲んでいる筈。

そうでなければ、あんな涼しげな顔などしていただけるわけがない。

「睡眠不足でも、頭は正常に働いている様ですな。これから学校へ戻るといふのに、疲れた顔などしていらねんから、昨夜のうちに薬を飲んでおいたのだよ」 スネイプはそんな事は当たり前前の事だという顔をしていた。

「なっ！？ズルイ！！貴方は学生の時、スリザリンだったんでしょうね。貴方はどんな手段を使っても、目的を遂げる狡猾さの塊の様な人ですから！」

「如何にも我輩はスリザリン生だった。それに今はスリザリンの寮

監をしている。お前がスリザリンに入れば、今以上に可愛がつてやるわ。」 スネイプは唇の端を吊り上げ、笑みを浮かべていた。

「スリザリンには入りたくありません！！絶対に入るもんですか！」

「そう嫌がらんでも良いではないか。蓮れん曉きょう家の半数近くはスリザリン出身者なのだ、お前もその可能性はおおいにあるのだぞ。」

「そうだとしても私は」

櫛くしが言い返そうとした時、スネイプが「怒った顔も魅力的だ」と言っつて櫛くしを抱き寄せ、キスで口を塞いだ。

スネイプは櫛くしの口内に舌を忍ばせ素早く舌を絡めとり、ネットリとした口づけを櫛くしが抵抗しなくなるまで交わした。そして更に唇を甘噛みしてから舌で耳や首を舐め回し、櫛くしの体の力が抜けるとそのまま首に強く吸いつき、紅い花を咲かせた。

「……………なっ……………ダメ！」

「頬を赤く染め、そんな潤んだ瞳で言われると、もっとシテと聞こえるが？」 スネイプはニヤリと笑った。

「違っ……セブルスのバカ！！こんな所につけたら見えちゃうでしょ！」

「制服のボタンを上まで留めておけば見えぬであろう。まあ、見えたら見えたで我輩は一向に構わんのだが……お前はもう誰かのものだと諦めて近寄る輩が減るのでな。何ならもっと目立つ所につけてやってもよいが？」

「絶対にダメ！！」 密が両手で首を隠すと、スネイプは声を上げて笑い出した。

密はこの男に抱かれるべきではなかったかも……と少し後悔し始めていた。

それから30分後、この自宅とホグワーツのセブルスの部屋の暖炉が一時的に繋がり、密とスネイプと鳳ほうは時間通りに移動した。

「私は鴉ういの姿で城の近くの森にいます。何かご用がある時はお呼び下さい。すぐに駆けつけます」 鳳が言った。

「うん、分かった」 櫛が返事をする、鳳は鴉の姿になって部屋から出て行った。

「我輩は校長の所へ行かねばならぬ。他の生徒達が城に着くまで、まだ数時間あるからお前は此処で寝ていると良い。これを飲んで眠れば起きた時、疲れもとれているだろう」 スネイプは薬瓶を櫛にわたした。

「ありがとうございます」

この人は、優しいんだか意地悪なんだか未だによく分からない……

まあ、よく私をからかって楽しんでいる事は間違いない。

ただ、そういう時でも心を隠しているから、からかわれた事に後から気づく事も多いんだけどね。

この人は他の人にも私と同じ様に、心を閉ざしているのだろうか？

それは何故？

私はいつか貴方の闇に触れる事が出来る様になる日が来るの
だろうか……

私に心を開いてくれる日が訪れるのだろうか……

いつの日にか……

「起きたまえ。間もなく宴が始まる」

「……んっ……うん……」

「起きぬのなら、目立つ所にキスマークをつけるが？」

「……えっ！？あつ、ダメ！起きますってか起きました」 櫛は慌

てて飛び起きた。

櫛のその慌て振りを見て、スネイクはゲラゲラ笑っている。

2ヶ月前のあの不機嫌そうな顔からは想像もしていなかったが、最近セブルスがこうやって、声を上げて笑っている姿をよく見る。

あっ！

でも鳳がいる時はこういつ風には笑っている顔、見た事ないな

……

何でだろう？

「何をボーツとしているのだ！組分け儀式が始まる。早く制服に着替えたまえ」

「は、はい」 櫛は急いで着替えを済ませ、スネイプと一緒に大広間へと向かった。

二人が大広間へ入って行くと既に組分け儀式は始まっていたのだが、生徒達は皆、スネイプが連れている少女の事が気になり、ザワザワと騒ぎ始めてしまった。

「静まれー！ー！！」 ダンブルドアの一言で大広間は一瞬にして静まり返った。

「組分けの途中じゃが、皆が気になってる様なのでわしから少し話をしようかの。スネイプ教授と一緒にいる少女じゃが、年は16で本来なら6年生なのじゃが、理由^{わけ}あって今まで魔法界から離れた所で暮らしており、入学が遅れてしまったのじゃ。彼女には今年1年、新入生諸君と一緒に学んで貰う事となった」

その後もダンブルドアの話は続き、特異体質の治療の為、週末はスネイプの所で過ごす事や櫛の学力次第で1年後、学年が変わる事などを説明した。

ダンブルドアの話が終わると組分け儀式が再開され、1番最後に櫛の名が呼ばれた。

「密・蓮暁」 マクゴナガルに名前を呼ばれた密はスネイプの元を離れ、他の1年生の時と同じ様に三本脚の椅子に座り、帽子を被った。

「噂では10年前に滅んだと聞いていたが、君はあの蓮暁家の子だね？生き残りがいたとは……」 密の頭の中に直接、声が響いて来た。

「蓮暁家の者は代々、二つの寮に振り分けられて来たのだが……フム……非常に難しい……勇氣に満ちていて頭も悪くない。才能もある。自分の力を試したいという素晴らしい欲望もある。実に面白い……さて、何処に入れたものかな？」

「あ、あのー、組分け帽子さん。焰えんじゅは、どの寮だったんですか？」

「焰えんじゅとは、焰えんじゅ・蓮暁の事かね？彼はスリザリンだったが、同じ寮がいいのかな？」

「いいえ。焰えんじゅとは違う寮がいいんです。スリザリン以外の寮にして下さい！」

「良いのかな？君は偉大になれる可能性を秘めている。スリザリンに入れば、間違いなく偉大になれる道が開けるが……嫌かね？」

「はい。スリザリン以外でお願いします」

「よろしい。それならば……『グリフィンドール!』」 帽子は最後の言葉を大広間全体に向かって叫んだ。

グリフィンドールのテーブルから割れんばかりの大歓声が起こり、みんな立ち上がって拍手で襜を迎え入れた。

他の寮生達はブーイングを送り恨めしそうにグリフィンドールの方を見ていたのだが、襜はそれに気づかず、グリフィンドールの空いている席に座った。

マクゴナガルが帽子と椅子を片付けると、ダンブルドアが立ち上がり腕を大きく広げ、にっこりと笑った。

「新入生の諸君、入学おめでとう。では、思いっきり、掻っ込み！」

その言葉を合図に目の前にあった空っぽの大皿に、食べ物が沢山並んだ。

「すげーい!」 襜は目の前の光景に驚いていた。

「姫君、何かお取りしましょうか？」 櫛の隣に座っていた赤毛の男の子が声を掛けて来た。

「へっ？姫？私の名前は櫛だよ。櫛・蓮暁。えーっと、貴方の名前は？」

「僕はフレッド。フレッド・ウィーズリー。年は君より下だけど、学年は1つ上さ」

「僕はジョージ。俺達双子なんだ。分からない事があつたら何でも聞いてよ。姫の為ならなんでもするよ」 フレッドの隣に座っていたジョージも挨拶して来た。

「だから、私は姫じゃないって……」

「そんなに美しい姿をしているんだから、櫛は俺達の姫君さ」 フレッドが言った。

「そうそう。君は俺達の……いや、ホグワーツの姫君さ。みんな一目見た時から君に夢中さ」 ジョージが言った。

密は二人にからかわれているのだと思ったが、別に悪い気はしなかった。自分の事を姫と呼んでいる事にそれ以上、反論しなかった。

スナイプの方を見ると、鬼の形相でこっちの方を睨みつけていた。で、密はすぐに視線をテーブルに戻した。

此処に来るまでは普通だったのに、何であんな怖い顔をしているの？

私、何かしたっけ？

組分けの時、スリザリンは嫌って頭の中で叫んでいたのを聞かされたって事はないよね……

他に思い当たる事が無いんだけど……

「姫、早く食べないとデザート無くなっちゃうよ」

「えっ！？ああ、うん。ありがとう、フレッド」

みんなが食べ終わるとダンブルドアがまた立ち上がり、広間中がシーンとなった。

「新学期を迎えるにあたり、幾つかお知らせがある。構内にある森に入ってはならぬ。何人かの生徒達には特に注意しておこうかの」
ダンブルドアはフレッドとジョージを見つめた。

「管理人のフィルチさんから、廊下で魔法を使わない様にとの事じや。それと今学期の2週目にクイディッチの予選がある。寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡する様に、以上じや。さあ、諸君、就寝時間じや」

1年生は各寮の監督生の後について寮へ向かった。

「すごい！此処の肖像画の人物達は動いたり、話をしたり出来るのね」

櫛にとって魔法界の事、全てが物珍しく驚きと興奮を与えてくれるものばかりだった。

「姫、あそこが我がグリフィンドール寮の入口です」「フレッドとジョージが同時に言った。

廊下の突き当たりにピンクの絹のドレスを着た「太った貴婦人^{レディ}」の肖像画が掛かっていて、その貴婦人に合言葉を言つと入口が開く仕掛けになっていた。

肖像画の裏の穴を通り抜けると、心地良い円形の部屋でフカフカの肘掛椅子が沢山置いてある談話室に繋がっていた。

その奥には男子寮と女子寮に分かれていて、5人1組の部屋には既にトランクが置かれていた。

みんなクタクタに疲れていて喋る元気もなくパジャマに着替えると、ベッドに潜り込み眠ってしまった。

櫛は宴の前に仮眠をとっていたにも関わらず、ベッドの中へ入るとあつという間に深い眠りの中へ落ちて行った。

第6章 ホグワーツでの新生活

魔法界での授業は初めて教わる筈なのに、どれも何となく知っている様な気がした。

マクゴナガルが教える『変身術』の授業では、一回目でマツチ棒を針に変えてしまったので他の生徒が出来るまでの間、特別にもう少し大きいものを変身させる術を教わった。

「ミス・蓮暁れんきょう、そのまま残りなさい」 授業が終わりみんなと帰ろうとしたら、マクゴナガルに呼び止められた。

「この後、授業はありませんでしたね。私の部屋でお茶を飲みながら、少し話しませんか？」

「はい」 密ひそはマクゴナガルの後について、副校長室に入ってしまった。

「校長から聞きましたが、貴女はあの蓮暁の長の孫だそうですね。瞳や髪の色が違うので気づきませんでした。記憶を失くしていて覚

えていないかもしれませんが、私は何度か貴女に変身術を教えた事があるんですよ。あれは確か、貴女が5歳の時でした……」

マクゴナガルはお茶を飲みながら、昔を懐かしむ様に言った。

「そうなんですか！？すみません、全然思い出せなくて……」

「記憶は封じられていても、体の方は覚えている様ですね。貴女も何か感じているんじゃないかもしれませんか？」

「えっ！？あつ、はい。此処に来て受けた授業の内容を、以前何処かで学んだ事のある様な……全て知っている様な気がしました。教授達が教えてくれた事以外にも私は幼い頃、色々と学んでいたんですよ」

思い出した記憶の中に、何かの薬の調合を学んでいるものがあり、それは嫌々ではなく自ら進んで楽しそうに学んでいて、他にも色々教えて貰いたくてウズウズしている感じだった。

「私が初めて貴女に会った時には既に、色々な術を使いこなして
ました。貴女が記憶を取り戻せば、5年生で受ける O W L 普通
魔法使いレベル試験はおろか、7年生で受ける N E W T レベルも
簡単にこなすでしょう」

「そうなんですか!？」 櫛は驚いていた。

5歳の時に既に、高度な術が使えていたなんて思ってもみ
なかつた。

ああ、だからダンブルドアは一年後の学力次第で最終学年を
決めると言ったのか……

記憶が戻れば、一年生から学んで行く必要なんてないもんね。

今日の授業でスネイプから『虫』を使うと事前に聞いていたので、『魔法薬学』の授業が始まる前に鳳ほうと融合しようと密は『禁じられた森』に来ていた。

「では、いいですか？」 鳳が言った。

「OK」 密が返事をする、鳳は呪文を唱え始めた。

目の前に居た鳳の姿が消えると、密は自分の中に何か暖かいものが流れ込んで来るのを感じた。

『これでOKです』 頭の中で鳳の声がした。

『それじゃあ授業に遅れちゃうから、急がなくちゃ』 密は急いで地下牢教室へ向かった。

「もう、何処へ行ってたのよ。間に合ったからいいけど、遅刻したら大変だよ。スネイプは自寮の生徒であるスリザリンのは甘いけど、他の寮、特にグリフィンドールには厳しいんだから」 同室ですぐに友達になったルーシー・カーチスが言った。

「ごめん、ごめん。席取っててくれてありがとう」 櫛がにっこり笑ってお礼を言うと、ルーシーは頬を赤くした。

スネイプが教室に入って来るとクラスはシーンと静まり返り、スネイプの呟く様な話し方でも、生徒達は一言も聞き漏らさなかった。

ノートを取った後、二人一組になっておできを治す簡単な調査を行った。

長い黒マントを翻しながらスネイプは生徒達が干イラクサを計ったり、蛇の牙を砕くのを見回って行き、グリフィンドール生が少しでもミスをする、容赦なく減点して行った。

スネイプは櫛が角ナメクジを茹でる作業に取り掛かろうとしているのに気づき、櫛の方に近づいて行った。

「どれだけ虫を克服出来たか拝見させて頂こう」 スネイプは櫛を

バカにした様な笑みを浮かべたが、柊はそれを無視して作業に取り掛かった。

虫を触る時、一瞬躊躇する動きはあったが、表情を変えずに作業を進める柊を見てスネイプは違和感を感じ眉を吊り上げたが、何も言わずにその場を離れた。

「出来上がったものを瓶に詰め、我輩の机の上に提出したまえ。授業終了」

調合した薬を提出し後片付けを済ませると、みんなさっさと教室を出て行った。

「ミス・蓮暁。昼食後、我輩の部屋に来たまえ」 ルーシー達と一緒に教室を出て行くこうとしていた柊に向かって、スネイプが言った。

「はい」 柊がスネイプの治療を受けている事はみんな知っていたので、何も言わなかった。

今日は金曜日なので、授業は午前中で終わりだった。

なので柊は今日の午後にはスネイプに呼び出され、開放されるのは日曜の夜か月曜の朝だろうと覚悟していた。

「柊、顔色悪いけど大丈夫？」

「えっ！？うん……私、少し外の空気吸ってから食事に行くから、先に大広間へ行つて」 柊は急いで森に向かった。

鳳との融合は体力と魔力をかなり消費していて限界が近かったので、鳳が体から出ると柊はその場に倒れ込む様に座った。

「柊様、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫。これ、かなり疲れるね……」 柊は荒い呼吸をしながら言った。

「慣れてくれば長時間でも平気になりますが、そうですね……今は二時間が限度といったところでしよう。あっ！それと、もう少ししたら急激な睡魔に襲われると思います。十分体を休めて下さい」

「うん、分かった。それじゃあ、私、行くね。余り遅いとルーシー達が心配しちゃうから」 櫛は鳳と別れ大広間へ向かった。

お腹は空いているのだが余り食べる気にはなれず、櫛はスープだけ飲む事にした。

「姫、具合でも悪いの？」 フレッドが言った。

「大丈夫。ちよつと疲れちゃっただけだから。それにこの後、スネイプ教授の所に行く事になっているから心配しないで」

「それならいいけど……だけど、スネイプの所で治療って嫌じゃない？ネチネチ嫌味言われそうじゃん」 ジョージが言った。

「治療は嫌な時もあるけど、私はみんなが言う程スネイプ教授の事、嫌いじゃないよ」

「私はスネイプと二人だけで過ごすなんて耐えらんない。授業だけ

で勘弁して欲しい」 ルーシーは物凄く嫌そうな顔をして言った。

「セブルス、ベッドで少し横になってもいい？」

「構わんが、体調でも崩したのかね？」

「セブルスの授業で虫を触るのに、神経集中し過ぎて疲れちゃったみたい。寝れば治るから心配しないで」 密はベッドに横になるとすぐに眠ってしまった。

授業中に感じた違和感は、こんなに疲れるほど虫の方に神経を集中させていて、態度が可笑しかったせいなのだろうか？

あれだけ嫌っていたものを触って調べたのだ、疲れもするか……

さて、櫛が眠っている間に採点を終わらせるとしよう。

起きたらたっぷりと可愛がってやらねばならんからな。

スナイプは櫛の唇に軽く触れるだけのキスをしてから机に向かった。

体がだるいし痛い……

起きたくないなあ……

「櫛、起きてこれを飲みたまえ」 スネイプは薬の入ったゴブレットを、櫛に差し出した。

「いらない。このまま寝てる」

「朝食を摂らずに授業を受ける気かね？」 スネイプは無理矢理、櫛の上半身を起こしゴブレットを持たせた。

「いらないってば！」 櫛はゴブレットを突っ返した。

「……！？虫が苦手な上に薬まで苦手とは……お前、本当に蓮暁家の人間か？」

「なっ、違っ」 密はスネイプのキスで唇を塞がれてしまった。

密の口の中に液体が流し込まれ、それをしかめっ面のままゴクリと飲み込んだ。

「この様にして飲めば、少しは美味しいのではないかね？」 スネイプはニヤリと笑った。

「美味しくなんかない！こんなんで味が変わる訳ないでしょ！！」

「そう怒るな。次はもう少し飲み易い物を用意しておこう。但し、先程飲んだものより効き目は弱いかな。もう体のだるさは抜けたであろっ？」

さつき飲んだ薬は即効性のものらしく、もうだるさや痛みは残っていなかったのだが、密は素直にお礼を言う気にはなれなかった。

「礼はお前の奏でる声で構わん」

スネイプはニヤリと笑みを浮かべ、素早く密に跨り覆い被さる様に

して唇を重ね合わせた。

「……………んっ……やっ……ダメ！」

櫛は必死に抵抗するが男性の力には敵わず、押さえつけられ服のボタンを外されて行った。

「もう朝食の時間でしょう？間に合わなくなるよ！」

「あの時計はお前が寝ている間に、時間を早めておいたのだ」

「はあ？信じらんない！金曜の午後から一步も部屋から出してくれなかったのに、まだ私を抱き足りないんですか！！」

食事だつて大広間ではなく此処で食べさせられ、これじゃあ監禁状態じゃない！

そりゃあ、ずっと抱かれていた訳じゃないし、昼間は課題と
か見てくれて2日で全部終わって、凄く助かったけど……

「いくら抱いても抱き足りぬ。お前は我輩を狂わす存在なのだ」

お前に狂わされているのは、我輩だけではない。

あの焰えんじゆ豎もその1人。

完全ではないその姿でも我輩はお前の虜となり、お前を取り巻くもの全てに嫉妬し、狂いそうになる。

……
いつまでも我輩だけを見つめ、我輩だけを感じていて欲しい

今、この時の様に……

愛している、密……

そして二人は絶頂を迎えた。

「本当に貴方はスリザリン街道まっしぐらですね!!」

「何とでも言いたまえ。その様な艶かしい格好で言われると、褒め言葉にしか聞こえぬ」

スネイプはニヤリと笑った後、杖を振り二人の体を清めた。

「今日のスネイプは、何か良い事があったのかな？」 夕食の席でフレッドが言った。

「グリフィンボールの今日の減点数が、過去最低で殆ど減らされていない。先週の過去最多も酷いが、これはこれで気味が悪い」 ジョージが言った。

そりゃあ、ご機嫌でしょうよ！

この2日半、好きな時に人を抱きその上、私の苦手な物をまた一つ知ったんですからね。

今度からは呼び出されても、日曜まで行くのはよそう。

週に一度抱かれればいいんだから、日曜の午後からで十分よ
!

「おい、ジョージ。スネイプの代わりに姫がご機嫌斜めだ」

「「姫、俺達が何かしたのなら謝るから、機嫌直してよ」「フレッドとジョージは大袈裟に膝を着いて謝りだした。」

「えっ！？あー、ちょっと、ちょっと……二人は何もしていないし、機嫌も悪くないからちゃんと座つてよ」 密は慌てて二人を椅子に座らせた。

「いつものスネイプみたいに眉間に皺を寄せていたけど、何かあったの？」 ルーシーが聞いて来た。

「ううん……ちょっと考え事をしていただけ。でも、もう解決策を見つけたから大丈夫」 密はにっこりと笑った。

「あっ！そうだ。姫、今週の金曜の夜クイディッチの選抜があるんだけど、俺達も出るから応援しに来てよ」 フレッドが言った。

「姫が来てくれたら、いつも以上の力が発揮出来て選手に選ばれる気がするんだ。治療の時間、遅らせても大丈夫なら応援しに来てよ」 ジョージが言った。

「見に行きたい！クイディッチの事、本で読んだけどまだ見た事な

いから楽しみだなあ」 密は嬉しそうに言った。

クイディッチとは、両チームそれぞれ七人の選手がいて四つのボールを使ってプレーする。

チェイサーは三人いて、クワッフルというサッカーボールぐらいの大きさの赤いボールを投げ合って、相手のゴールの輪の中に入れ、輪の中に入ると10点獲得する。

キーパーは味方の輪の周りを飛び回って点を入れられない様に防ぐ。

各チームにいる二人のビーターはプレイヤーを箒から叩き落そうと暴れまわる二つのブラッジャーという黒いボールを敵の陣地へ打ち返すのが役目で、双子はこのビーターの席を狙っていた。

シーカーは『金のスニッチ』と呼ばれる胡桃ぐらいの大きさの眩い金色の球で小さな銀の羽をつけ、素早く動く球を捕まえる役目だ。シーカーがスニッチを取るまで試合は続けられ、捕まえたチームには150点と大きな得点が入る。

密は本を読んで知った時、面白そうだからやってみたいとスネイプに言ったら「駄目だ」と断られてしまった。

クイディッチの試合をしている時に焰豎が襲つて来たら、咄嗟に身を守る事が出来ないし、自分達もすぐに助けに行く事が出来ないと言われてしまったので、仕方なしに諦めたのだった。

金曜日の『魔法薬学』の授業終了後、予想していた通りスネイプに今日の午後、部屋に来る様に言われたが、クイディッチの選抜を見たいから行かないと言って、スネイプの返事が返つて来る前に櫛は教室を出て行った。

夜、ルーシーと一緒に競技場へ選抜の様子を見に行き、フレッドとジョージがプレイしているのを見て櫛は、やってみたいなあと思つた。

フレッドとジョージは見事ビーターに、そして二人の友達であるアンジェリーナという女の子もチェイサーに選ばれ大喜びしていた。

その後、談話室でこの五人と双子の友人リー・ジョーダンという男の子の六人で祝賀会を開き、就寝時間になるまで大騒ぎしていた。

翌朝、朝食を済ませ寮へ戻ろうと立ち上がった途端、櫛の体が宙に浮いた。

「えっ！？キヤーーッ！！」

いつも間にかスネイプが来ていて櫛を持ち上げると、荷物でも持つかの様に肩に担いだ。

「降ろして下さい！」　櫛は足をバタつかせ、手は拳を作ってスネイプの背中を叩いた。

「余り暴れるとスカートが捲れパンツが見えますぞ」　スネイプは櫛の膝裏を片腕で押さえ歩き出した。

「見ていないで助けてよー」と双子やルーシー達に言うが、そんなの無理だという様にみんな首や手を横に振っていた。

教職員テーブルに目をやると、ダンブルドアは微笑ましい光景だともいような顔をしてニコニコと笑っていて、他の教授達も週末の治療を受ける為に連れて行かれていると思うので、何も言わなかった。

「降ろせー！！」 廊下に出ても櫛は騒いでいた。

「勿論、降ろしてやる。ベッドの上にな」 スネイプはそう言っ
て部屋に入って行った。

第7章 クリスマス

「ええーっ！みんな家に帰っちゃうのお……」

同室の女の子達やフレッド、ジョージ、アンジェリーナ、リーもみんな冬休みは家に帰るらしく今年、グリフィンドール生で学校に残るのは密しきだけだった。

保護者であるスネイプは夏休みにしか家に帰らないので、密も学校に残らなくてはいけなかったのだ。

「本当は姫と一緒に残りたかったんだけど、ゴメン」 フレッドとジョージが言った。

「ううん、気にしないで。休暇、楽しんで来てね」 みんなを送り出した談話室はひっそりとしていて、寂しく感じた。

初日からセブルスの所へは行きたくないし……

何しよう……

特にやりたい事がなかったので、櫛は図書館で本を読んで時間を潰す事にした。

暇潰しで軽く本を読むつもりだったが、いつの間にか夢中になっていて、司書のマダム・ピンスに閉館の時間だと言われるまで本に没頭していた。

櫛はそのまま夕食を食べに行き、スネイプに今日は寮で寝ると告げてから大広間を出て行った。

寮へ戻る途中、櫛は何か嫌な気配を感じたので立ち止まり、周りを見回したが人の姿はなかった。

気のせいかと思いき出した時、得体の知れない恐怖に襲われ、見えない何かが自分の傍を通り過ぎて行くのを感じた。

「何かあったのかね？」 柊はスネイプの部屋にドアを開け、無言のままスネイプに抱きつき真っ青な顔をして振るえていた。

「お茶を淹れて来よう。そこに座って待っていたまえ」 柊は首を横に振り、スネイプに抱きついたまま離そうとしなかった。

スネイプは無理に離そうとはせず、柊が落ち着いてきて自分から椅子に座るのを待ってお茶を淹れた。

「何があったのか話してくれませんか？」

「……何かが居たの……目には見えないんだけど、凄く嫌なもの……何なのか分からないけど、凄く恐かった……」 柊はまだ蒼い顔をしていた。

「セブルス、さっき寮で寝るって言ったけど、やっぱり此処で寝てもいい？」

「ならばお前のベッドを用意せねばいかな」 スネイクは杖を取り出した。

「あつ、あのね、いつも通り一緒のベッドでいいの……ダメかな？」

「いや、構わぬ」

「お願いがあるんだけど……」 パジャマに着替え、ベッドに入った密はスネイクに言った。

「何だね？今夜は無理にお前を抱くつもりはないから安心して眠って構わんのだぞ」

「そうじゃなくて……セブルスにギュッと抱きしめられたまま眠りたいの……」

今夜は1人になりたくない……

誰かに傍にいてもらいたい……

人の温もりを感じていたい……

「姫のお望みとあらば……」 スネイクは櫛を自分の傍に引き寄せ、
包み込む様に抱きしめた。

「フレッドやジョージじゃないんだから、セブルスまで呼んで呼ばないでよ」

フレッドやジョージからは入学した日から呼んで呼ばれていくから慣れちゃったけど、セブルスに呼んで言われるのって何だか恥ずかしい。

今日のセブルスはいつもと違って何だか凄く優しい気がする。

私の事、気遣ってくれているのかな……

「お前の事を姫と呼んでいるのは、双子だけではないのだぞ」

「そ、そうなの？あと誰がそう呼んでいたっけ？」

「……学校中の者がそう呼んでいる事に、お前は今まで気づかなかつたのかね？」 スネイプは呆れ顔をしていた。

「ウソ……全然、知らなかった……」

《まったく、鈍感な奴だ……》

「おばあちゃま、これ何？」

櫛は壁に掛かっている表面が水に覆われた鏡の様な物を指差して言った。

「これは水鏡と言うものだよ」

「鏡なの？でもこれ、あたしの顔じゃなく男の人の顔が映ってるよ」

「櫛、本当に男の人が見えるのかい？」

緋桐ひきりは驚いて聞き返した。

「うん。黒い髪の毛のお兄ちゃんが映ってる」

それを聞いた緋桐は水鏡に手をかざし、ブツブツと呪文を唱えた。

「櫛、ここに映っている人物は、将来お前の伴侶となる者なんだよ」

「はんりよ？」 緋桐の顔には不安の色が浮かんでいた。

水鏡に伴侶が映し出される時、近い将来、一族から禁忌を犯す者が現れるという……

その者はきつと、櫛を狙って来るであろう……

「おばあちゃま、この文字は何？」

「これは、彼の名前。彼の名前は」

「何なのだ！これは！？」

「……どうかしたの？」 スネイクの叫び声で密は目を覚ました。

「どうかしたのかではない！！」 スネイクは鬼の形相をし、部屋
の中を指差していた。

櫛は横になったまま向きを変えたのだが、目の前の光景に驚いて飛び起きた。

プレゼントの山で部屋中が、足の踏み場も無いほど埋め尽くされていたのだ。

「セブルスって凄い人気があっただね」

「ゴンッ！」

「痛っ……」 櫛の頭に拳骨が落ちて来た。

「よく見たまえ」 スネイクは米神をピクピク震わせていた。

「えっ！？これ、私宛？」 プレゼントを幾つか手に取って見ると、みんな櫛宛てになっていた。

「魔法界のクリスマスって学校中の人にプレゼントをあげなきゃいけないの！？どうしよう……私、仲の良い人にしか送っていない……」

ゴンッ！

「痛い！」 真剣に悩んでいる櫛の頭の上に、再び拳骨が落ちて来た。

「全ての者にクリスマスプレゼントを送る訳なかるう！お前に好意を持っているから送られて来たのだ！」

《愛情という感情を封じられ、その手のものには疎いからと
いっても鈍感過ぎる……》

「鈍感で悪かったですね！だからって人の頭をグーで殴る事ないで
しょう！！」 櫛は涙目になって頭を摩っていた。

「人の心を勝手に覗くな！」 スネイクは杖を振り、プレゼントを
全て消した。

「覗いてなんか あーっ！全部消す事ないじゃん！！」

「こついった物は我輩に来る訳がないから、全てお前の部屋に送っただけだ！」 スネイプは不機嫌なまま言った。

「セブルスの馬鹿！！」 そう言って柢は部屋を飛び出した。

私からセブルスへのプレゼントも混ぜていたのに……

セブルスの足元にあったのに気づいて貰えなかった……

一つだけセブルスの傍にあったのに……

柢が怒って部屋を飛び出した理由が、スネイプ宛のプレゼントに気づいて貰えずに送り返された事だとは、スネイプは全然気づいていなかった。

「何をしているんです？」

「あっ、マクゴナガル教授。寮に来るなんて珍しいですね。何かあったんですか？」

「貴女を呼びに来たんです。クリスマスだというのに朝食にも現れず、昼食まで抜く気ですか？」

「えっ！？もうそんな時間だったんですか？すみません、頂いたプレゼントを整理していて食事の時間に気づきませんでした」

「凄い量ですね。一人では大変でしょうから後で、私も手伝ってあげましょう。ですが、その前に食事をしなくてははいけません」

「はい」 密はマクゴナガルと一緒に大広間へ向かった。

冬休み、学校に残っている生徒は10人ぐらいしか居なかったの、一つのテーブルに生徒と教授が向かい合わせになる様に座っていた。

柊はスネイプと顔を合わせたくなかったの、スネイプから一番離れた席に座って食事をした。

お腹いっぱい食べた柊はマクゴナガルと一緒に寮へ戻り、プレゼントの整理を始めた。

「スネイプ教授と喧嘩でもしたのですか？」

「まあ、そんな感じです」

柊はマクゴナガルに朝起きて、部屋中のプレゼントを見たスネイプが激怒した事と、柊がスネイプに送ったプレゼントに気づいて貰えず、送り返された事を話した。

「スネイプ教授の足元に一つだけ置かれていたのに、気づいて貰えなかったんです」

「まあ、あの方は今までそういった経験が少ないから、自分宛だと気づかなかったんでしょう。後で、手渡してみたらどうです？」

《だからセブルスは朝からずっと不機嫌だったのですね。密に対して情が沸いて、送って来た相手に嫉妬でもしたのでしょうか。人と関わりたがらなかった彼にも、密という子供みみたいな存在が出来て少しづつ変わって来た様ですね》

「……今朝、スネイプ教授が怒っていたのは、私が自分でも気づかないうちに何かしてしまっただんでしょうか？私の愛情部分がまだ欠落したままで、人の気持ちを考えられずに傷つけたり怒らせたりしているんじゃないかと思って……」

「愛情の一部は、まだ封印されたままなのでしょうが、貴女には人を思いやる気持ちはちゃんとありますよ。愛情がなければ、そうやって人を傷つけてしまったかもと悩んだりしませんからね。スネイプ教授はきつと貴女にプレゼントを送った者に対して、嫉妬でもしたのでしょう」 マクゴナガルはにっこりと笑った。

「嫉妬ですか？」

嫉妬という感情は、今の私にはまだよく分からない。

だから今朝、セブルスがあんなに怒っていた気持ちもよく分からない。

「嫉妬したという事は、スネイプ教授が貴女の事を大切に思っている証拠ですよ。まるで本当の父親の様ですね。可愛い我が子を取られたくないという感情が、スネイプ教授に芽生えた様ですね」

「父親ですか……」

マクゴナガルが私とセブルスの関係を知ったら、相当驚くん
だろうな……

まさか肉体関係にあるとは、思ってもいないだろうからね。

愛情という感情が欠けていても、セブルスの体を欲する時がある。

そういう素振りを見せた事はないから、多分セブルスは気づいていないだろう。

彼を求めるのは自分を抱き、快樂へと誘ってくれるからなのだろうか？

それとも他に何か理由があるのだろうか？

私とセブルスは体の関係はあるけど、恋人ではないんだよね

……

セブルスは私の事を愛していると言っていたけど、私にはまだその感情が無い。

私に愛情が戻った時、私はセブルスを好きになるのかな？

それとも別の人？

そういえば、あの記憶の夢に出て来た男の人って誰なんだろう……

目を覚ましてから彼の顔を思い出そうとしても、顔がぼやけて思い出せない。

もう出会っている人なのか、まだこれから出会う人なのかも分からない。

セブルスの叫び声で目が覚めちゃったから、名前も思い出せなかったな……

クリスマス昼食も豪華だったが、夕食はもっと豪華でクリスマス・ケーキつきだった。

柊はお腹いっぱい食べたが、昼食と同様スネイプから離れた席に座り、目を合わす事なく食事をした。

夕食後、柊は今朝送り返されたプレゼントを持ってスネイプの部屋の前をウロウロとしていた。

朝、怒って飛び出した後、セブルスとは殆ど顔を合わせていないから入りづらいな……

今日は止めておこうかな……

「長時間、そこでウロウロしておきながら中へ入らずに帰る気かね？」

寮へ戻ろうと歩き出した時、ドアが開きスネイプが出て来て柵を部屋の中に入れた。

「今日はもう来ないと思っていたが、何の用だね？」　スネイプは無表情のまま言った。

「今朝、貴方に送り返された物を渡しに」　柵は投げつける様にプレゼントを渡した。

「いらないのなら、送り返さずに捨てて貰って結構ですから！」

柵は不機嫌なまま部屋を出て行こうとしたが、ドアに手を掛けた瞬間、スネイプに後ろから抱きしめられた。

「今朝、足元にあったプレゼントはお前が我輩に送ってくれたものだったのか……気づかずに全てお前の部屋へ送ってしまったてすまなかつた。これは有難く戴く。だが、我輩はお前にプレゼントを何も用意しておらん……」

「セブルスがクリスマス・プレゼントをくれるなんて初めから期待していない。だってセブルスがプレゼントを選んでる姿なんて想像出来ないもん」　柵はニヤリと笑った。

「あっ！プレゼントの代わりに美味しい紅茶が飲みたいな」

「すぐに用意しよう」 スネイプは襪を抱きかかえ椅子に座らせると、お茶の用意を始めた。

「そついえば今朝、我輩の心を覗いた様だがいつ『開心術』を覚えたのかね？」 お茶を飲みながらスネイプが聞いた。

「『開心術』って何？それに私、セブルスの心の中を覗いた覚えないよ。まあ、たまに相手の考えている事が何となく分かる時はあるけど……」

「『開心術』とは相手の記憶や考えている事を覗き見る術なのだが、本当に知らないのかね？」

「うん。知らない」

《生まれ持った能力の一つか、記憶を封印される前に会得していたものを無意識に使ったのかは分からんが、密は『開心術』に長けている様だな……》

「ねえ、セブルスの考えている事は人より分かり難いのは何故？」

人には知られたくないものがあるのは分かるけど、セブルスは何か深い闇の様なものがある気がする。

彼の心はいつも何かでか包み隠されている感じで、それが何なのか分からない。

「……『開心術』」 スネイプは一瞬、躊躇してから話し出した。

「己の心を閉じ、相手の侵入を防ぐ術。相手の方が術に長けている場合は覗かれてしまうかもしれないが、この術を会得していれば、殆ど相手に覗かれる心配はない」

「ふうん、そうなんだあ。だけど、いつも『閉心術』を使っている疲れはない？それに本当の自分を相手に知って貰えないのって、何だか寂しい気がする……」

「お前には関係なからう」 スネイプは冷たく言い放った。

「そつだよね。私には関係ないよね、ゴメン」

スネイプの言葉が心に突き刺さり、心が痛い様な苦しい様な気持ちになったが、密にはそれが何なのかよく分からなかった。

第8章 誕生日

年明け早々、しきみ櫛とスネイプはダンブルドアに呼ばれ校長室に来ていた。

「良い知らせではないのじゃが、話しておかねばいかんと思つての……しきみ櫛、君はあと数日で誕生日を迎え17歳になるんじゃないかな？」

「はい」

「魔法界では17歳で成人となるのじゃが、この日、君に掛けられている保護呪文のうち一番強力な術の効果が切れてしまうのじゃ。その術は未成年者にしか効かぬ術での、君が17歳になったのと同じ時に効力を失つてしまうのじゃ」

ダンブルドアの顔には、いつものあの優しい笑顔は無く、不安と心配の入り混じつた面持ちでしきみ櫛を見つめたまま話を続けた。

「他の護りの術、特に君がこの世界に戻つて来たからセブルスによつて掛けられた術の効力がある為、えんじゆ焰豎はすぐには襲つて来ぬが、

その効力がどれだけ持つかは分からぬ。術が破られる前に君の記憶が戻っていると良いのじゃが……」

私の記憶の中に焰豎に対抗し得る鍵が眠っているらしいのだが、それがどういったものなのかまでは、ダンブルドアも分からないと言っていた。

焰豎を封印するものなのか、倒すものなのかも分からない。

それと、どうすれば私の記憶が全て戻るのかも分からないままだった。

あと数分で日付が変わり誕生日を迎えるのだが、一人で居るのが不安になって櫛は夜遅くにセブルスの部屋に押しかけた。

「此処で誕生日を迎えるのは良いが、クリスマスの朝の様な事にはならんだろっな？」

「えっ！？ああ、プレゼントの事？それなら大丈夫。私の誕生日は誰にも教えていないから、プレゼントは届かないよ」

「なら良いが……櫛、少しの間、目を閉じていて貰いたいのだが？」

「いいけど……」 何だろう？と思いつつながら櫛は椅子に座ったまま目を閉じた。

スネイプは後ろへ回り「Happy Birthday」と言って櫛の首にペンダントを着け、唇にキスを落とした。

「あ、ありがとう」 スネイプからプレゼントを貰えるとは思ってもみなかったので、櫛は少し驚きながらお礼を言った。

「クリスマスは何も用意してやらなかったから、誕生日ぐらいはと
思ってた……」 スネイクは頬を赤くし、照れているようだった。

そして二人はいつもの様に同じベッドに入り、眠りについた。

陽が落ち暗くなった部屋に櫛が一人で居る時、またあの得体の知れ
ない恐怖に襲われ、反射的に近くの家具に身を潜めた。

何かが居ると感じた櫛は、目を凝らして辺りを見回した。

何、あれ!?

あの紅く光っているものは何?

密から離れた場所に小さいが紅く光っているものが二つ見えた。

それは瞳の様にも見え、何かを探しているかの様に右に動いたり、左に動いたりしながら少しづつ密に近づいて来ていた。

一体、何を探しているのだろうか?

物……

人……

まさか、私!?

部屋の1/3まで近づいて来た時、人の様なぼやけた輪郭が見えて来て、紅く光っているものはその人の目だと分かった。

その人物の顔はぼやけたままで見えないが、櫛のはそれが焰豎だと感じていた。

焰豎が私を探しに来たんだ。

此処に居てはいけない。

逃げなくちゃ……

気づかれる前に逃げなくてはと思うのだが、金縛りにでもあったかの様に、体が全然動かない。

嫌だ……

此処に居たくない……

助けて……

助けて、セブルス……

「……み、しきみ！ 櫛……！」

「……んっ……うん……セブ……セブルス……！」

目を覚ました櫛は

真っ青な顔をしてスネイプに抱きついた。

「魔されていたが、大丈夫かね？」

「……………焰豎が……………焰豎が私を探していた」 柹は震えながら答えた。

「どついつ事だ？」 スネイプは片眉を吊り上げた。

柹は今、夢で見た事を全てスネイプに話した。

「クリスマス・イブに感じたあの嫌な気配は焰豎だったの。何故だか分からないけど、あの時は私に気づかず焰豎は通り過ぎて行った。でも、さつきは私があ部屋に居る事に気づいているみたいだった。姿は見えなくても、あ部屋に居ると確信して私を探している様に見えた」

「お前に掛けられている護りの呪文が焰豎から身を隠してくれたのだろう。だが誕生日を向かえ、一番強力な術が消え護りが弱くなった隙を突いて焰豎が近づき、お前を探しに来たのかもしれない」

悪い夢でも見ただけだと思いたいが密のあの怯え様は、ただの夢では無いと感じてのものだろう。

密程ではないが、我輩も何か不安を感じる。

我輩が四六時中、密について回る事は出来ぬ。

我輩が傍に居ない時に焰豎に襲われでもしたら……

記憶が戻りきっていない今の密では、己で身を護りきる事は無理だろう。

例え記憶を取り戻したとしても、焰豎に敵うかどうかとも分からぬ。

何か密を護る手立てはないのか……

やっとこの手に触れ、胸に抱き留める事が出来たというのに、密をこのまま手放したくはない。

もう二度とあの様な思いはしたくない……

愛する者を失う事だけは……

「陽が昇ったら校長に話し、何か手立てを講じよう。さあ、もう少し眠りたまえ」 スネイプは密を抱きしめ、安心させる様に髪を撫でた。

二人は眠れぬまま朝を迎え、朝食の前にダンブルドアの元へ行き、密が見た夢の話とクリスマス・イブの日に廊下で起きた事を全て話した。

「焰豎が居た位置は部屋の1/3辺りと言ったかの……という事は密に気づくまでもう少し時間があるという事じゃの。それまでに何か良い手立てが見つければ良いのじゃが……とりあえず、城の保護

呪文は強化しておこう。またこの様な夢を見たり不安や恐怖を感じたら、わしかセブルスの元へ来なさい。夜中でも構わんからの」

「はい」

《予想していた事とはいえ、こんなにも早く櫛に近づいて来ておるとは……この様子では櫛に掛けられている保護呪文も夏まで持たぬかもしれんの。それまでに櫛の記憶が戻り、焰豎に対抗する力を取り戻せていれば良いが……》

「さてさて、朝食に向かうとするかの」ダンブルドアは櫛を安心させようと、にっこりと優しい笑顔で言った。

「お前の誕生日だというのに焰豎のせいで、とんだ一日になってしまったな。明日から授業が始まるが、授業中でも何か感じたらすぐに我輩の元へ来たまえ。いいな」

「うん……今日のセブルスは優しいね」

私の事、心配して気遣ってくれているんだね。

他の人達には意地悪で陰険な姿ばかり見せているけど、本当はとても優しい人だという事を私は知っているよ。

照れ隠しに意地悪な行動を取る時もあるけど、私が不安や恐怖で震えている時は、いつも優しい。

私以外の人にも優しい態度で接する事ってあるのかな？

他の人にも優しいセブルスを想像してたら、胸が苦しくなっ
て来た……

「穉、どうかしたのかな？焔豎の気配でも？」 スネイプが心配そ
うに穉の顔を覗き込んだ。

「え！？うつん、どうもしないよ。大丈夫」

あれっ？

胸の苦しいのがなくなった。

何だったんだろう???

「セブルスの誕生日って今日だったの！？私と三日しか変わらないのに、何で教えてくれなかったのよ！」

夕食後、ダンブルドアに今日がスネイプの誕生日だと聞いた密は、慌ててスネイプの部屋に駆け込んだ。

「聞かれなかったから言わなかったただけだ。それに態々言い触らす様な事でもなからう」

「そ、そりゃあそうだけど……ちゃんとお祝いしたかったんだもん。プレゼントだって用意してないし……」

「プレゼントなら、お前自身で構わんが」

スネイプはニヤリと笑って密を抱き寄せたかと思ったら、息が苦しくなる程の熱く甘いキスをした。

「んっ……ダメ……こういうのはダメだって……」

「我輩がそれで良いと言っているのだ。今日の主役に逆らう気かね？」

「明日も授業があるから逆らいます。プレゼントは後日、ちゃんと用意するから……じゃあ、私、寮に戻るね」

櫛はドアノブに手を掛けドアを開けようとするのだが、ピクリとも動かなかった。

このドア、魔法で鍵が掛かっている！

でも、いつの間にか？

「そう慌てて帰る事もなかるう？こっちへ来てゆっくりして行きたまえ」 スネイプはベッドに腰掛け、櫛に隣に座る様に言った。

「嫌です！ドアを開けて頂けませんか？スネイプ教授」 反抗の意を表す為に、櫛はワザと言い方を変えた。

「開ける気は無い。そつだ、お前にこれをあげよう」 スネイプは杖を一振りした。

櫛が何とかしてドアを開けようと手を左右に動かしてドアノブを回そうとしていると、天井から大きな蜘蛛が櫛とドアの間に垂れ下がって来た。

「……………！？ギャー……ッ！！」 櫛は蜘蛛に驚いて跳び上がり、スネイプに抱きついた。

「初めからこの様に我輩の腕の中に納まっていれば、手荒な事をせずに済んだものを……………それにしても、まだ虫を克服していなかったとは……………授業の時、どの様な方法を使って虫を触っているのか、お聞かせ願いますかな？」

櫛はしまったと思い、スネイプの腕から逃れ様と必死に抵抗するのだが、しっかりと抱きしめられていて、スネイプから離れる事が出来なかった。

「なつ、何の事でしょう？」

「惚けても無駄ですぞ。虫を扱う授業の時のお前には、いつも違和感を感じていたのだ。他の者は気づいていない様だが、我輩の目は誤魔化せませんぞ」

「本当に何の事だかさっぱり分かりません。さっきのはいきなり目の前に現れてビックリしただけです」

「そう言うのなら、これから出す虫を触って頂けますかな？」 スネイプは唇の端を吊り上げて笑い、杖を振った。

机の上に角ナメクジが現れたのを見て、櫛は少し体を後退させた。

「授業で扱った事のある虫だ。克服したと言うのなら、触れる筈だが？」

ど ぶ ぶ ぶ ぶ ぶ ……

鳳^{ほう}が居なくちゃ触れないよう。

ホグワーツに来てからも虫に慣れようとしたけど、全然ダメなんだよね……

見るだけで精一杯なのに、触るなんて到底無理……

やっぱり、この人は意地悪だ！

人が困っているのを見て楽しんでる様に見える。

この間、優しいだなんて思った私が馬鹿だった……

「……虫を扱うには前もって下準備が必要なんです。そうじゃないと、まだ触れません」 密は開き直って言った。

「下準備とは何だね？」

「企業秘密です！」 スネイクは目を細めて密を見つめた。

「まあ良い。いずれその企業秘密とやらをお聞かせ願おう。もう帰って構わん」 スネイプは杖を振って虫を消した後、ドアに掛けた魔法を解いた。

「へっ！？帰っていいの？私を抱く為に閉じ込めたんじゃないの？」

「からかったただけだが、我輩に抱かれないのかね？我輩はそれでも構わぬが」

「い、いえ。寮へ帰ります」 密はスネイプの気が変わらないうちに、部屋を出て行った。

第9章 特異体質

2月も終わりに近づいたある日、夢にまた焰豎えんじゆが現れたのだが、櫛しきみはダブルドアやスネイプに報告しに行かず、その日の授業を終え、城の外へと出掛けた。

櫛は一人で湖まで行き、雪が積もったベンチを見つけると杖を振ってベンチの雪を払い、そこに腰掛けて今朝見た夢に出て来た焰豎の顔を思い出していた。

部屋の半分まで近づいて来ていた焰豎の顔は、まだはつきりとは見えていなかったのだが、最近、思い出した記憶の中に出て来た少年に似ている様な気がしていた。

ん。
名前は覚えていないけど、幼い頃よく遊んでくれたお兄ちゃん。

焰豎の顔を思い出そうとすると、お兄ちゃんの顔が浮かぶ…

…

お兄ちゃんが焰豎なの？

あの優しかったお兄ちゃんがパパやママやおばあ様、蓮暁家
のみんなを死に追いやったの？

違うよね？

別人だと思いつつも同一人物かもしれないという思いは消えず、
密は今朝からこの事をずっと考えていた。

考え事をしている間に辺りは暗くなり始め、密は慌てて城へと戻っ
て行った。

「「姫！！今まで何処へ行ってたのさ？」」 玄関ホールに入った途端、フレッドとジョージが抱きついて来た。

「姫、冷たいけど、今までずっと外に居たの？」 フレッドが聞いた。

「そうだけど、ちょっと……く、苦しい……」 フレッドとジョージが左右から密を挟む様に抱きしめて居る為、密は身動きが取れずにいた。

「「風邪をひかないように俺達が姫を温めてあげる」「」 フレッドとジョージは密の顔に頬を摺り寄せて来た。

「ちょっと、ちょっと、止めてよ」

「貴様等、そこで何をしている！！」 スネイクが鬼の形相で3人に近づいて来た。

「グリフィンボール、30点減点。それと蓮暁は我輩と来たまえ！」
スネイクは密の腕を掴み、引き摺る様に歩き出した。

「スネイク教授、姫が悪いんじゃないやありません」

「罰則なら僕達が……」 フレッドとジョージが叫んでいるが、スナイプはそれを無視して櫛と一緒に自分の部屋へ戻って行った。

スナイプは部屋に入ると魔法で鍵を閉め、櫛を乱暴にベッドへ放り投げると、その上に跨り制服を破く様に脱がし首筋や胸に強く吸い付き、紅い印を刻んで行った。

櫛は一度も抵抗せず、まだ濡れていない蜜壺にスナイプのものが入って来ても、顔を歪めただけで声すら上げなかった。

「何故、抵抗しなかった？」 スナイプは一人果てた後、杖を振り櫛の服を元に戻しながら言った。

「貴方が何故、そんなに怒っているのか分からなくて、その事を考えていたら抵抗し忘れただけ……ねえ、フレッドとジョージに対して怒りを露にしていたのに、その怒りを静めるかの様に私に性的欲求をぶつけたのは何故？」

貴方のその感情が分からない。

さっきの怒りはクリスマスの日の朝に感じたものに、よく似ていた……

セブルスは嫉妬というものをしていたの？

今の私にはそれがどういふものなのか、理解出来ない。

理解出来ないから私は貴方を苦しめているの？

「……セブルス、私が居ない方がいい？ 貴方の前から消えた方がいい？」

私が居なくなれば、貴方はこの苦しみから解放される？

貴方の苦しんでいる顔は見たくない……

貴方が苦しんでいるのかと思うと、胸が締め付けられて押し潰されそう……

「何故、その様な事を言うのだ！？我輩がお前を乱暴に扱ったから、嫌気がさしたのか？もう二度とあの様な事はせぬ。だから我輩の前から居なくなったりしないでくれ……頼む……」

スナイプは櫛を強く抱きしめ、首元に顔を埋めた。

「…………セブルス、泣いているの？」

「……………」

スネイプは何も答えなかったが、声を押し殺して泣いている様に思えた。

櫛はそれ以上、何も言わずに黙ってスネイプの頭を撫でていた。

「…………私…………貴方に抱かれて不快な思いをした事は、今まで無かった…………気乗りしないまま貴方とセックスをして、抱かれているうちに気持ち良くなる事はあったけど、最初から最後まで気持ち良くなれずに、ずっと嫌だと思っていたのは初めて…………」 スネイプが落ち着いた頃を見計らって櫛は話し出した。

「私にはまだ愛情が欠けているせいか、さっきの貴方の気持ちは分からない。嫉妬という感情も理解出来ない。それでも、あんな抱かれ方は嫌だと思った…………あんな風に抱かれるのなら、他の人に抱かれるか禁忌を犯した方がいい…………」

「すまない…………二度とあの様な事はしないと誓う。だから…………」

「許して欲しい？それじゃあ、私が今から話す事に対して、怒らな
いと約束してくれる？約束してくれるなら、許してあげる」

「話とは何なのだ？」 スネイクは片眉を吊り上げた。

「約束してくれなきゃ話さない」

「……分かった。怒らないと約束しよう」

スネイクが怒らないと約束してくれたので、密は今朝見た焔豎の出
て来る夢の話をした。

最近、思い出した記憶の話はせずに、夢の話だけを……

「な！？何故それを」

「怒らないって約束したでしょう！色々考え事していたら言いそび
れちゃったの。言いに行こうとしたらフレッドとジョージに捕まる
し、セブルスにはあんな事されちゃうし……」

「……と、とりあえず校長に報告しに行かねばならんな」

櫛とスネイプは校長室へ行き、ダンブルドアにスネイプに話した内容と同じ事を話した。

「わしやセブルスは焰豎が既に、部屋の半分まで来てしまっている事に不安を感じておるのじゃが、櫛、君はわし等とは違う事で悩みを抱えている様に見えるが？」

ダンブルドアのブルーの瞳で見つめられていると、心の中まで覗いているのではないかと思う時がある。

嘘や隠し事をして、すぐに見抜かれてしまう様な気がする……

「焰豎の顔がはっきり見えた訳ではないので違いかもしれませんが、先日思い出した記憶に出て来た少年と焰豎の顔が重なって見えるんです。焰豎の顔を思い出すと、あの優しかったお兄ちゃんの顔が浮かぶんです」 櫛は今日1日、気になっていた事をダンブルドアに話した。

「優しかった少年が、残虐非道な行いをした焰豎だとは思いたくないのじゃな。同一人物なのはわしにも分らんが、何かのキツカケで優しかった者が豹変する場合もある……」

「そうですね……」

話を終え、校長室を後にした櫛はスネイクとも別れて寮へ戻って行った。

「「姫！」」 談話室に入った途端、フレッドとジョージがやって来た。

「「ゴメンよ、姫。俺達のせいでスネイクに……」」 フレッドとジョージは片膝をついて言った。

「その芝居掛かった謝り方は止めて、普通にしてよ。別に罰則とかじゃなくて、私に用があったただだから気にしなくていいよ」 櫛はにっこりと笑って言った。

翌朝、目を覚ました櫛は体のダルさと熱っぽさを感じていたが、その事を誰にも言わずに授業を受けていた。

その日の最後の授業である『魔法薬学』で虫を使う様なので、櫛は鳳ほうと融合し、地下牢教室へと向かった。

『櫛様、いつもと様子が違う様な気がするのですが、具合でも悪い

のですか？』 頭の中で鳳の声がした。

『うん……疲れちゃったみたいで少し体がダルいけど、大丈夫だよ。この授業が終われば明日、明後日と休みだから、ゆっくり体を休められるし』

『ですが、この術はかなり体力を消耗します。体調が急に悪化する場合もあって危険です！』

『じゃあ、今日はドアの近くの席に座って限界だと思ったら、すぐに廊下に出て融合を解くから……ね、いいでしょう？』

『……分かりました。くれぐれも無理はしないで下さいよ』

『うん、分かってるって』

今日、調合する薬の材料や煎じ方、用途などをノートに書き写している間はまだ何とか意識を保っていたが、調合が始まる頃には体調が悪化して来て、熱が急激に上がって来た。

『密様、そろそろ限界では？』

『……うん』 柊は意識が朦朧としながら答え、フラフラとドアの方へ向かった。

「ミス・蓮れん暁きょう、まだ授業中だが何処へ行く気だね？」 調合をせず
にドアへ向かっている柊に気づき、スネイクが言った。

だが、柊にはスネイクの声が届いておらず何も言わずに廊下へ出ると、崩れる様に座り込み融合が解ける瞬間、意識を手放した。

「『柊様』！」「後を追って廊下に出て来たスネイクと、人型の鳳が同時に叫んだ。

「鳳、何故お前が柊の体から出て来たのだ！？」

「それは後で説明する。それより柊様を！」

「……ああ、そうだな。我輩の部屋へ」

鳳は柊を抱えスネイクの部屋へ向かいスネイクは一旦、教室に入ると生徒達に課題を与え自習にし、急いで自分の部屋に戻った。

「セブルス、柊様といつ交わりをした？」 鳳はスネイクが部屋に

入って来てすぐに聞いた。

「今はそんな事を言っている場合ではない！症状を見てすぐに薬を調合せねば」

「いや、関係がある。いつセックスをしたのだ！」

「昨夜だ。それがどう関係あると言っただい！？」 スネイプは眉間に皺を寄せ、イライラしながら言った。

「ならば明日の夜まで薬は効かぬ。どんな薬を煎しても無意味だ……」 熱に魘され、呼吸の荒い密を見つめながら鳳が言った。

「薬が効かぬ？それはどういう事だ、説明したまえ！」 スネイプは今にも鳳の胸倉を掴みそうな勢いで言った。

「蓮暁家の女性が第1子を身籠る条件は知っているな？」 鳳が言った。

「ああ、知っている」

「その条件が満たされない時、精子は女性の体内で2日掛けて別の

物質に変化する。初めての性行為から半年は薬が効くが、それ以降はこの間、どんな薬も効かぬ体になるのだ。特殊な体質の為、滅多に病気にかからない筈なのだが……何があつた？セブルス」 鳳は鋭い眼差しでスネイプを見つめた。

「密様と何があつたのだ！」 鳳は怒鳴り声を上げた。

スネイプは更に眉間に皺を寄せ、黙つたまま密を見つめていた。

「何があつたのかと聞いているのだ！セブルス！！」 鳳がスネイプに掴みかかろうとした時、その手を意識を取り戻した密が掴んだ。

「止めて……セブルスのせいじゃない……私は大丈夫だから……」

「ですが……」

「鳳……お願い……」 密はそれだけ言うと、再び目を閉じた。

セブルスを助ける為だけに意識を取り戻したのか？

熱に魘され意識が朦朧としているのに、自分の事よりもセブルスを……

まあ、今回の事は密様の体調の異変に気づかなかつた私にも非はある。

だからもう、これ以上セブルスを責める気はない。

「鳳、セブルスは？」 次の朝、目を覚ました密が言った。

「今は朝食の時間です。私が無理矢理セブルスを大広間へ行かせました。密様だけでなく、あの者にまで倒れられては面倒ですからね」

「迷惑かけてゴメンね」

「いえ。私の方こそ貴女の異変に気づかず融合してしまい、体調を悪化させてしまって、すみませんでした。私は貴女の使い魔として失格です」

「鳳のせいじゃないから、自分を責めないで。それにもう、熱も下がって来て体も楽になって来ているから大丈夫だよ」 密は鳳を安心させようと、にっこりと笑って言った。

「朝、熱が下がっていても夕方からまた上がって来たりするので、油断は禁物です。他に体調の変化など、ありませんか？」

「起きた時から少し頭痛がしている」

自分の体調をちゃんと言わないで、昨日のような事になって心配かけてはいけないと思い、密は素直に症状を言った。

「頭痛ですか……今の貴女には薬が効きません。我慢出来ますか？」

「大丈夫だけど、何で薬が効かないの？」

鳳は昨日、スネイプにした説明と同じ様な内容を密にも話した。

「今夜には薬も効く様になります。それまで大人しく寝ていて下さい」

「……うん」

薬が効く様になっても、出来れば薬は飲みたくないな……

でも熱が下がっていなかったら、無理矢理にでも飲まされる
んだらうな……

薬を飲まないで済む方法があるといいのに……

そんな事を考えている間に櫛は眠ってしまい、昼過ぎに目を覚まし
た。

傍にはいつもより蒼い顔をしたスネイプが居て、櫛の額に氷水で冷
やしたタオルを乗せていた。

「気分はどうだね？」

「昨日よりは楽……セブルス、心配かけてゴメンね。それと看病し
てくれて、ありがとう」

「いや、我輩のせいだから、お前が謝る必要はない。あと数時間もすれば薬が効く様になる。我輩が飲み易い薬を煎じてやろう」

やっぱり、飲まされるんだね……

こんなに心配掛けちゃったから、今回は我慢して飲むしかないか……

最後の交わりから48時間が過ぎ、スネイプが調合した薬を飲んだのだが密の体調は良くならずに、夕方から上がり出した熱が夜になって更に上がっていた。

「鳳、どういう事なのだ？何故、未だに薬が効かぬのだ！」 スネ

イプは苛立ちながら言った。

「私にも理由が まさか……セブルス、貴方、櫛様の前で涙を流しましたか？」 鳳は何かを思い出した様に聞いた。

「我輩は涙など……」 と言いながらスネイプも何か思い出した様な顔をした。

「どうやら、その顔は緋桐様（ひこうさま）が言った事を思い出した様ですね」

ああ、そうだ……

あれは確か、焰豎と闇の帝王が数人の死喰い人と一緒に櫛を連れ去る計画がある事を知り、緋桐に知らせに行った時、将来、我輩が櫛の前で涙を流すと言われた。

『櫛がある事柄を心から知りたいと思った時、貴方は必ず涙を流します。貴方の涙が思い出すキツカケとなるのです』と……

我輩は絶対に人前では涙を見せぬと言ったのだが、そういう術を掛けてあると言われた。

薬が効かぬのは、そのせいだと言うのか？

密は一体、何を知らたいと思ったのだ？

「頭が……頭が割れそうなくらい、痛い……」
密は荒い呼吸をし
ながら、頭を抱える様に蹲った。

パリンッ！

薬瓶などガラス製の物が全て割れてしまった。

「「密様」!?」 二人は同時に叫び、密の傍に寄った。

「密様の目の色が変わり始めている。今、この状態の密様では魔力のコントロールが上手く出来ないから、目の色が本来の金色に変わった時、大きな衝撃が来る。セブルス、その衝撃を防げる様に備えておけ！」

ドンッ!!

という大きな音と共に密を中心にして爆風が起こり、部屋の中の物は壁にぶつかりドアも壊れ、スネイプも鳳も吹き飛ばされたが間髪、防御術が決まり、二人は壁への激突を免れた。

「このまま密様の力が暴走すれば、大惨事が起きる。その前に密様を落ち着かせないといけない。密様を止められるのはセブルス、貴方しかない！」

鳳が言い終わる前にスネイプの体は勝手に動いていて、密を優しく包み込む様に抱きしめていた。

「密、何も恐がる事はない。何があっても我輩が傍についている。だから安心してこのまま眠りたまえ」

「……セブ……ルス……」 樞はスネイプの顔を見つめてから、眠る様に意識を手放した。

「樞様！」

「心配ない。気を失っただけだ」

スネイプは杖を振り部屋の中を元に戻すと、樞をベッドへ寝かせた。

「イヤ！みんなの事、忘れちゃうなんてヤダ！パパやママやおばあ
ちやま、それにセブルスの事まで忘れちゃうんでしょ？そんなの
絶対、イヤ！！」

「密、これはお前を護る為なんだよ。それに、ずっと離れたままに
なる訳ではない。いずれ全てを思い出すから、心配いらないよ」
緋桐は優しい声で安心させる様に言った。

「でも、今度セブルスに会っても誰なのか分からなくなっちゃうん
でしょう？セブルスが知らない人になっちゃうんでしょ？そんな
のヤダよ……みんなの事、忘れたくないよ……」

密は大粒の涙を流しながら、首を横に振っていた。

「みんなとバイバイするのも嫌。おばあちやま達の傍に居たい……
一人で遠い所へ行くななんてヤダよー。お願いパパ、ママ、おばあち
やま、密を一人にしないで……」 密は緋桐にしがみついて泣いて
いた。

「仕方の無い事なんだよ、密。お前を護る為なんだ。許しておくれ

……」

「愛しているよ、密。私達の可愛い子……」
密の両親は涙を流しながら、密を抱きしめた。

密が静かに目を開けると、スネイクが密の頬を撫でていた。

「泣いていたが、何か嫌な夢でも見ていたのかね？」

「……記憶を封じられた日の事を思い出したの。私、みんなの事やセブルスの事を忘れてなくなって駄々をこねていたけど結局、封印されて未だにセブルスの事、思い出せないでいる……」 密は上半身を起こしながら言った。

「気にするな。いずれ全てを思い出す」

「うん……」

私と貴方はどういう関係だったの？

マクゴナガルと同じ様に、私に何か教えていたの？

思い出しそうで思い出せない……

「セブルス……もう少し、泣いてもいい？」

「ああ、勿論構わぬ。我輩が居ない方が良いなら、席を外すが？」

「ううん……傍に居て欲しい……」

「そうか……」 スネイプは密を抱きしめ、髪を撫でた。

また会えるから心配いらなと言っていた両親はもう、この世には居ない……

記憶の中でしか会えないなんて、そんなの嫌なのに……

パパにも……

ママにも……

おばあ様にも……

もう二度と触れる事が出来ない……

また会えると言ったのに……

「……ゴメンね、セブルス。本当は人が泣いている姿を見るの、嫌いなんでしょっ？」

「先日、我輩もお前に涙を見せたから、これでおあいこだ」

「泣いていた事、認めるんだあ」 密は顔を上げてニヤリと笑った。

「イヤ……そういう訳では……」

「傍に居てくれてありがとう、セブルス」 密はスネイプの頬にキスをした。

「礼なら頬ではなく、唇が良いのだが」

密は軽く触れるだけのキスをスネイプの唇にして、すぐに布団に潜った。

スネイプは半分冗談で言っていたので、まさか本当にしてくれとは思わず、少し驚きながら表情を緩めていた。

「熱はもう下がった様だな。目の色はまた黒みがかった薄茶になっているが、体調の変化とかはあるかね？」 スネイプが言った。

「もう何ともないけど、目の色がどうかしたの？」

「頭が割れそうなくらい痛むと言って魔力が暴走し始めた時、お前の目が本来の金色に変わっていたのだ」 スネイプは密に説明した。

「魔力の暴走って何？頭痛が酷くなったのは覚えているけど、その後の事は覚えていなくて……」

「お前の真の姿である金色の瞳に銀色の髪、そして記憶が戻った時の魔力は今以上となる。その力のコントロールが出来ない状態で本来の力が発揮されてしまうと、力が暴走してしまうのだ」

今以上の魔力って言われても、ピンと来ない。

魔力が強いから幼い頃から色々な術を覚えて、コントロールする術を身につけて行ったのかな……

今はまだ全てを思い出した訳じゃないから、姿が元に戻ってもコントロール出来ずに暴走してしまうって事なのかな……

「お前に聞きたい事があるのだが」

「何？」

「我輩の授業の時お前が廊下に出て倒れる寸前、お前の体から鳳が出て来たが、あれは何だったのだ？以前、話していた企業秘密ってやつなのか？」

そういえば目が覚めた時、見られてしまったと鳳が言ってた

んだっけ。

見られちゃったのなら隠していても無駄だから、素直に話しておいた方がいいよね……

「怒らないで最後までちゃんと話を聞いてくれる？」

「ああ」

「あのね、ホグワーツに来てからも虫に慣れようとしたんだけど、全然触れなくて鳳に頼んで一時的に触れる様にして貰ったの。それが私と鳳の融合。鳳が私の中に入って虫に対する恐怖だけをコントロールしてくれたの。言っておくけど、調合は手伝って貰ってないからね」

「鳳との融合か……便利なものだな。お前の調合の腕は承知しているから、鳳が手伝っているとは疑わぬが、今後の授業はどうするのだね？」 スネイプは無表情のまま、櫛を見つめていた。

どうするかって言われても、困るんだけど……

セブルスにバレちゃったから、もうこの方法は使えないだろうし、どうしよう……

「虫を扱えずに減点を食らうか、今まで通りこの方法で授業を受けるのかと聞いておるのだ」

「えっ！？この方法で授業を受けてもいいの？」 柊は驚いた顔をしていた。

「鳳と融合せねば虫は扱えぬのであるう？今まで通り、それ以上の手出しをしないのなら、許可しても構わぬが？」

「本当？本当にいいの？」

「ああ、但し条件がある。今夜はこのまま此処に泊まる事」

「それって、セブルスに抱かれるって事？」

「嫌なら鳳との融合の件は無したが、どうするね？」

「……分かりました。今夜は此処に泊まって貴方に抱かれます」
密は少しふてくされて言った。

……あれ？

よく考えたら先週の木曜以来だから今日か明日には、しなく
ちやいけないんだった。

ああ、何だ……

全部、私の為なんじゃん。

あんな意地悪な言い方をして本当、捻くれ者なんだから……

「どうかしたのかね？」

「えっ！？ううん、別に」

何も気づいていないフリをして、セブルスのこの捻くれた優しさに甘えておこづ。

ありがとう、セブルス。

第10章 ルーシーの確信

「ルーシー、他の道から行こうよ」 櫛つねは階段の途中で立ち止まった。

「玄関はすぐそこなのに、何言ってるのよ。行くわよ、櫛」

櫛はルーシーに手を引っ張られ、半ば引き摺られる様にして歩き出した。

「あそこでマクゴナガルとスネイプが居るけど、何を話しているんだろっね？あっ！ねえ見て、フレッドとジョージも外へ行くみたい。合流しよっかあ！」

階段の先にはスネイプとマクゴナガルが居て、玄関の扉の所にはフレッドとジョージが居た。

「えっ！？ああ、うん……」

玄関ホールに近づくとつれ、心臓の音が早くなり、ルーシーにまで聞こえているのではないかと思うほど、大きな音がする。

これは何？

私は何かの病気なの？

「ミス・蓮れんきょう、丁度良い所で会いました。ダンブルドアが呼んでいます。私達と一緒に校長室へ行きましょう」
櫛くしに気づいたマクゴナガルが声を掛けて来た。

「は、はい」 心臓が爆発寸前の櫛はビクツと体を少し震わせて返事をした。

櫛はルーシーと別れ、スネイプとマクゴナガルと一緒に校長室へ行くと、ダンブルドアはいつもの優しい笑顔で三人を迎え入れた。

「櫛、6月に行われる普通魔法使いレベル試験、通称O・W・Lひくさつを受けてみなさい」 ダンブルドアが言った。

「えっ!?!でも、私……」

「試験まで2ヶ月しかないが、君の実力なら問題無くクリア出来るじやろう。それと、他の教授方とも話し合ったのじやが、来学期からの学年の既に決定してある。君は最終学年の7年生に進級じやよ」
ダンブルドアは櫛に向かってウィンクをした。

「まだ記憶が完全に戻っていないのに、1年生からいきなり7年生だなんて……私、授業について行ける自信がありません」

「貴女なら大丈夫ですよ。記憶が完全でなくても既に貴女は7年生レベルの学力を持っています。それは私が保証します」 マクゴナガルが言った。

マクゴナガルの『保証します』という言葉は嬉しいけど、やっぱり自信が無い。

それにあと2ヶ月しかないのにOWL試験まで受ける事になっちゃったし……

此処に戻って来てまだ、1年も経たないのに本当に大丈夫なのだろうか？

「お前なら大丈夫だ。我輩も保証しよう」 スネイプは密の頭を撫でる様にポンポンと軽く叩いた。

スネイプの言葉と行動で密の不安な気持ちは不思議と消え、安心感が生まれていた。

「……分かりました」

「では、この件はこれで決まりじゃの。ところで櫛、セブルスから聞いたのじゃが、また焰豎えんじゆの夢を見たそうじゃの」 ダンブルドアが言った。

「はい。部屋の2/3まで来ていました」

「そうか……もし少しでも焰豎の気配を感じたら、すぐにわし等の元へ来るのじゃよ」

「はい」

寮に戻ってから櫛はルーシーにOWL試験を受ける事と、来学期から最終学年の7年生になる事を伝えた。

「9月から学年が違くなっちゃうのね……寂しいな。じゃあ、9月からはもう一緒に授業が受けられないんだ……」 ルーシーはとても寂しそうな顔をしていた。

「そんな顔しないで、ルーシー。学年は違くなっても寮は一緒だし、何より私の一番の親友はルーシーなんだから」

「うん、ようだよな。離れ離れになる訳じゃないもんね。7年生になるって事は、来学期からホグズミードに行けるの？いいなあ、私も行きたい」 ルーシーは元気を取り戻し、にっこりと笑った。

「行くには保護者のサインが必要なんでしょう？サイン、貰えないから行けないと思う。夏休みだつて外出する時は、スネイプ教授と一緒にじゃなきゃ外に出して貰えないんだもん、ホグワーツの敷地内からは一歩も外に出してくれないよ」

行ってみたいなあ、ホグズミード。

でも焔豎に見つかったりしたら大変だから、絶対に許可証にサインなんてしてくれないしなあ……

いつか行ける日が来るのかな？

一人で外出とかもしてみたい。

「「姫！そういう事なら俺達にお任せを」」 いつの間にかフレッドとジョージが、密の隣に座っていた。

「俺達が姫達をホグズミードへ連れて行ってあげるよ」 フレッドが言った。

「えっ！？何言ってるの？」 密もルーシーも驚いた顔をしていた。

「此処だけの話、俺達は秘密の抜け道を知っているのさ」 ジョー

ジが声を低くして言った。

「すっごーい！ねえ櫛、二人に連れて行って貰おうよ」 ルーシーは目を輝かせて言った。

「フレッド、ジョージ、私は行けないけどルーシーだけでも連れて行ってあげてよ」

私が城から出て焔豎に見つかったら私だけではなく、みんなを危険に晒す事になる。

みんなを巻き込む訳にはいかない。

「それは構わないけど、姫も一緒に行こうよ」 フレッドが言った。

「ゴメン、私は無理。週末はスネイプ教授の所で過ごさなくちゃいけないし、OWLの試験勉強もしないと……あと2ヶ月しかないからね」

「……それは残念……」 三人は肩を落とし、ガツカリした顔をしながら言った。

それから二週間ほど経った土曜日に、フレッドとジョージはルーシーを連れてホグズミードへ遊びに行った様で月曜日の朝、密がスネイプの所から戻って来ると、お土産のお菓子や悪戯グッズを密に渡した。

「図書館へ行って来るけど、ルーシーはどうする？」

「私はいいや。やっとレポートが完成したところだから今日はもうこれ以上、本は見たくないの」 ルーシーは苦笑いをした。

「じゃあ、一人で行って来るね。就寝までには戻って来るから」
櫛は寮を出て図書館へと向かった。

「スネイプ教授！」 廊下を曲がった時、前方にスネイプの後ろ姿と女子生徒の姿を目にした櫛は、来た道を少し戻り壁の影に隠れた。

何で私、隠れているんだろう？

それに、このモヤモヤした感じは何？

苛立つ気持ちと胸が締めつけられている様な感覚とで、苦し
くなつて来る……

何でこんなに苦しいの？

何で……

「「姫！！何してんの？」」 フレットとジョージがやって来た。

「えっ！？ああ……別に……」

「「じゃあ、一緒に寮へ戻ろう」」

密はフレッドとジョージに両腕を掴まれ、二人に腕組をされている格好になって寮へ戻って行った。

「あれ？密、図書館へ行ったんじゃないの？」

寮を出て行ってからそんなに時間が経っていないのに戻って来た密を見て、ルーシーは不思議に思った。

「えっ！？ああ、そういえばそうだったね。でも、もういいや……私、先に部屋に戻っているね」 密は女子寮へと向かった。

様子の可笑しい密を見てルーシー、フレッド、ジョージの三人は首を傾げていた。

「密、何かあったの？」 密の事が気になったルーシーは、密の後を追って部屋に入ってきた。

「ルーシー……私、病気かもしれない……あのね、1ヶ月半前からなんだけど急にドキドキして来たり、胸が絞めつけられる様な感じになる時があるの……」 部屋には密とルーシーの二人だけだったので、ずっと悩んでいた事を思い切って聞いてみた。

「それって特定の相手に対してドキドキしたりしているんじゃない？」

「う、うん……そうだけど、何で？」

「それなら病気じゃなくて、恋煩いよ。気づかないうちに封印が解けていて、恋愛感情が生まれたんじゃない？」 ルーシーは目を輝かせて言った。

「恋煩い？これが人を好きになつた時の感情なの？でも、その人と一緒に居ても全然平気な時もあるよ」

「それは、まだ完全に術が解けていないせいなんじゃない？で、貴女に想われているそのラッキーな人は誰なの？その人は密の初恋の人になるのよねえ……だれ？ダレ？誰？」 ルーシーはニヤニヤしながら密に詰め寄った。

「初恋……私が……セブルスに……恋？」 密は独り言の様に呟いた。

「はあ？ええーっ！っ！！」 ルーシーに聞こえていた様で、大声を出して驚いていた。

「櫛、貴女の好きな人ってスネイプ教授なの！？嘘でしょう？学校一の美人で人気者の貴女が、学校一の嫌われ教授の事が好きだなんて……」 ルーシーは物凄いシヨックを受けた顔をしていた。

「可笑しいでしょう？だから、恋じゃないって。歳だって離れていくし……」

「相手が年上だろうが年下だろうが、そんなの関係なく気づいたら好きになっていくものなんだから、歳の差を気にする必要はないと思うけど？櫛が自分の感情が分からないと言うのなら、私が櫛を観察して見極めてあげる」

ルーシーの言う通り、愛情部分の封印が解けて来ているのかな？

セブルスを見てドキドキしたりしているのは、私がセブルスに恋をしているからなの？

これが恋した時の感情……

私がセブルスに恋を……

「ほら！櫛、行くよ」

「へっ！？」

「ボーツとして、次の授業の事でも考えていたんでしょう？なんせ次は、愛しのスネイプ教授の授業だからねえ」 ルーシーはニヤニヤと笑みを浮かべながら言った。

「ち、違うよ。試験勉強で少し疲れているだけだよ」

「ふうん……隠しても無駄だよ。この一週間、密を見ていて確信したもん。密はスネイプに恋してるって」

「ち、違うって……」

「はい、はい。それじゃあ、愛しの彼が待つ教室へ行きますか」
ルーシーは密の腕を掴んで、地下牢教室へと向かった。

スネイプが教室に入って来ていつもの様に授業が始まったのだが、密は授業に集中出来ないでいた。

ルーシーがあんな事言うから、変に意識しちゃうじゃない。

これじゃあ、まともに顔が見らんないよお……

「では各自、材料を準備して調合を始めたまえ」

生徒達は材料を切り刻んで、それを火にかけて大鍋に順番に入れて行き、決められた回数を決められた方向に回し、混ぜ合わせて行った。

「櫛、これ忘れてるよ」 隣で調合していたルーシーが、櫛に手渡した。

「ありが……キヤーーツ！虫！！」 ルーシーが手渡した物は調合に使う、乾燥した大ナメクジだった。

今日の調合で虫を使う事はスネイプから聞いていたのだが、櫛は自分に恋心が芽生えたかもしれないという事が気になり、虫を扱う事

をすっかり忘れていて、今日は鳳と融合していなかったのだ。

柊は驚いた拍子に自分の大鍋を引っくり返してしまい、右腕に大きな火傷を負ってしまった。

「何を騒いで　柊!？」　スネイプは慌てて柊の傍に駆け寄った。

「すぐに医務室へ行きたまえ」　スネイプは柊の腕に冷却術を掛けた後、そう言った。

「……はい」　柊はそのまま教室を出て行った。

はあ……と溜め息をつきながら医務室へ向かっている途中で、柊は何か違和感を感じた。

『みつけた』

「誰？」　声が聞こえたので柊は周りを見回したのだが、誰も居ない。

声が聞こえたと思ったんだけど……

それに、さっきから少し嫌な気配がしている。

もしかして、焰豎!?

セブルスの元に戻らなくちゃ!

「ミス・蓮暁、どうなさったんです?今は授業中の筈では?」

密が地下牢教室へ戻ろうとした時、『闇の魔術対する防衛術』の教授である、ルクリア・ラナンキュラスが現れ声を掛けて来た。

「あつ……あのー、薬学の授業で火傷をしてしまったので、医務室へ行くところなんです」

現れたのが焔豎ではなくランンキュラスだったので、密はホッと胸を撫で下ろした。

「そうでしたか、それなら私が付き添ってあげましょう」

そう言ってランンキュラスが密の傍に来た時、何か甘い香りがして密はそのまま意識を失った。

昼食の席に櫛の姿が見当たらなかったのでスネイプは、校医であるマダム・ポンフリーに櫛の具合を聞いてみた。

「蓮暁ですか？蓮暁は今日は一度も医務室に来ていませんよ」

その後、スネイプはグリフィンドル生にも櫛の事を聞いてみたのだが、姿を見ていないと言われた。

一体、櫛は何処に居るのだ？

今日の授業で様子が可笑しかったのと、何か関係があるのだろうか？

授業が残っていたとはいえ、やはり一人で行かせるべきではなかった……

スネイプは櫛を一人にしてしまった事を後悔しながら、城中を探し回っていた。

何処に居るのだ、櫛！

どうすれば居場所を見つけられる？

.....

鳳^{ほう}なら櫛の居場所が分かるかもしれないな.....

スネイプが鳳が居る森へと向かおうとした時、
ふくろうつ便が飛んで
来てスネイプに一通の手紙を渡して行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2842h/>

ハリポタ二次創作 ~ 蓮暁 密 ~

2010年10月14日17時42分発行